

田辺市のひきこもり支援

(窓口開設 19 年目の報告)

平成 31 年4月～令和2年3月

和歌山県田辺市

目 次

I. 田辺市におけるひきこもり支援

- | | | |
|----|----------------|---------|
| 1. | | 田辺市ひきこ |
| | もり支援 | 1 |
| 2. | | 田辺市 |
| | ひきこもり相談窓口 紹介ビラ | 4 |

II. 令和元年度 支援の実績

- | | | |
|----|-------------------------|----------|
| 1. | | 相談実 |
| | 績 | 5 |
| 2. | 支援の報告 | |
| | (1) | 家族会 |
| | (ほっこり会) | 11 |
| | (2) 青年自助会実績 | |
| | (3) 啓発活動・視察・問い合わせ | 12 |
| | (4) ひきこもり支援啓発講演会 | 13 |
| | (5) 田辺市ひきこもり検討委員会 議題／活動 | 31 |
| | (6) | ひき |
| | こもり検討委員会 講義 | 32 |

III. 参考資料

- | | | |
|----|--------------------|----------|
| 1. | | ひき |
| | こもり家族の会 ほっこり会 紹介ビラ | 41 |
| 2. | | 認定NPO法 |
| | 人 ハートツリー 紹介ビラ | 42 |
| 3. | NPO法人 かたつむりの会 紹介ビラ | 45 |
| 4. | | NPO法人 共 |
| | 生舎 紹介ビラ | 46 |
| 5. | | 田辺市ひきこ |
| | もり検討委員会 設置要綱／委員構成 | 47 |

I. 田辺市におけるひきこもり支援

＝ひきこもり支援について考える＝

田辺市では、平成13年にひきこもりの相談窓口を開設するとともに、保健、医療、福祉、教育、雇用などの関係者からなる「田辺市ひきこもり検討委員会」を組織し相互の連携を図り、協力しながら課題の解決に取り組み、19年目を迎えました。

ひきこもり支援の取り組みを始めた平成13年当時に比べると、ひきこもり相談窓口は地域の中でひきこもりの相談ができる場所として知られてきていることと思います。

また、若者に対しては、相談窓口以外にも、相談できる機関が増え、ひきこもり支援に関わる関係機関の活動も盛んになり、社会資源も充実しつつあります。

しかし、今年度は、関東で大変痛ましい事件が続き、この事件の後、ひきこもりの状態にあるご本人やその家族から、相談窓口に多くの声が寄せられました。

このことから、ひきこもりの状態にある方やそのご家族は、それぞれ異なる経緯や事情を抱え、生きづらさと孤立の中で、日々、葛藤を繰り返しておられるということを痛切に感じました。

これらの問題が、ただ安易に、事件と「ひきこもり」の問題を結びつけることは厳に慎むべきであると考えます。

そのため、ひきこもり状態にある方を含む生きづらさを抱えている方々が、希望や自分自身に対する肯定的な感覚・地域社会とつながっている感覚などを再び見出していく過程を取り戻していくと共に、自宅以外に安心できる自分の居場所を見つけ、人との交流の場を見つけ、学ぶ場・働く場・社会に貢献する場を見出していくことが回復の過程では必要です。

そこから、地域社会の中で、新たな自分のあり方を見出していくことが大切だと思います。

これからも、相談機関の啓発を続けていき、8050問題を含め、より相談しやすい体制を整備すると共に、地域住民がそれぞれに、共に安心して過ごせる街づくりをどうしていくかを考えていくことが、これからの課題ではないかと思います。

今後も引き続き、ひきこもり検討委員のみなさまと、ひきこもり支援の周知に今まで以上に取り組み、気軽に相談していただけるような体制づくりに努め、また、切れ目ない支援を構築していくため、ひきこもり検討委員会を中心としたネットワークを活かし、中学校や高等学校等の教育機関や支援機関との連携も図りながら、支援ができるように取り組んでまいりたいと思います。

ひきこもり支援の経過

平成 9 年 6 月	議員一般質問
平成 13 年 1 月	田辺市ひきこもり検討委員会を設置
平成 13 年 3 月	ひきこもり相談窓口の開設(保健師 1 名専任)
平成 13 年 4 月	田辺市ひきこもり検討小委員会の設置
平成 14 年 5 月	HAPPYが、ハートツリーハウス開所 社会的ひきこもり青年の居場所活動開始(国・県より補助金)
平成 14 年 6 月	田辺市ひきこもり家族会の設置
平成 16 年 1 月	田辺市ひきこもり青年自助グループの育成(月2回)
平成 16 年 3 月	ひきこもり相談窓口担当者1名増員 2名(保健師・相談員)体制に
平成 16 年 4 月	田辺市ひきこもり家族会が自主運営
平成 17 年 4 月	ひきこもり青年自助会(知音CHI-IN)が開始(週 1 回) ハートツリーハウスが、「ひきこもり者社会参加支援センター」 運営事業補助金を受けて運営(県・市の補助金)
平成 18 年 10 月	ハートツリーハウスがNPO法人認可 ハートツリーに名称変更
平成 20 年 8 月	NPO法人ハートツリーが南紀若者サポートステーション開設
平成 21 年 4 月	ひきこもり青年自助会(知音CHI-IN)が休会
平成 26 年 4 月	南紀若者サポートステーションが若者サポートステーション With You 南紀に名称変更 (県より若者総合相談窓口 With You 事業が委託されたため)
平成 27 年 4 月	ひきこもり者社会参加支援センター ハートツリーが、 ひなたの森に名称変更
平成 29 年 12 月	NPO法人ハートツリーが認定NPO法人に正式認定。
平成 31 年 4 月	認定NPO法人ハートツリー ひなたの森の 和歌山県「ひきこもり者社会参加支援センター」事業が 国の「ひきこもりサポート」事業に移行。

- ◆ 官民を超えたひきこもり支援対策の構築
- ◆ 事業報告・計画への意見
- ◆ 視察・講演会等への協力
- ◆ 対応が困難な事例の相談
- ◆ 委員の学習会

ひきこもり検討委員会
(年2回)

市担当課(商工・福祉)
紀南児童相談所
田辺市教育研究所
田辺市養護教諭研究会
和歌山県教育委員会
高等学校

ほっこり会(家族会)
知音CHI-IN(自助会)
学識経験者
精神科医師
臨床心理士・公認心理師
NPO法人かたつむりの会
NPO法人共生舎
(公社)白浜・田辺青年会議所

ひきこもり検討小委員会
(月1回)

市担当課(保健・福祉・教育)
田辺保健所
紀南こころの医療センター
田辺市障害児・者相談支援センター
ゆめふる

やおき福祉会
ふたば福祉会
認定NPO法人ハートツリー
(ひなたの森
若者サポートステーション
With You 南紀)
学識経験者



ひきこもり相談窓口

ご家族・ご本人さんだけで、悩んでいませんか？

不登校のまま卒業・・・

中退後自宅中心の生活をしている・・・

進学、あるいは、就職したけれど途中で社会参加をしていない・・・



まずは、電話・メールをいただけませんか？

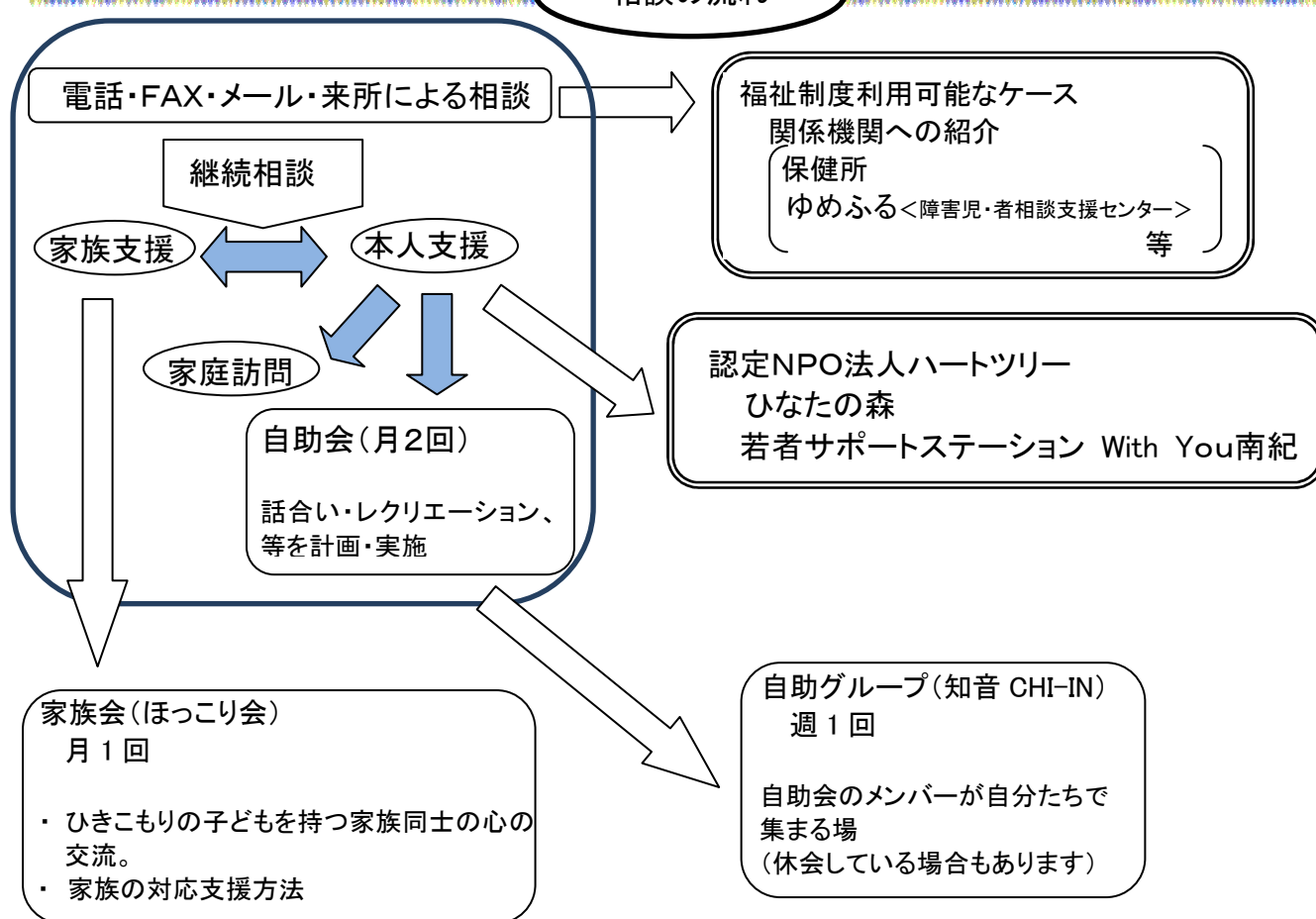
相談を定期的に続けていくうちに徐々に元気を取り戻していきます。

自助会、家族会（ほっこり会）があります。

会への参加は、相談窓口担当がお会いした後、紹介させていただきます。



相談の流れ



問い合わせ先

田辺市健康増進課

TEL : 0739-26-4901 (平日8:30~17:15)

TEL・Fax : 0739-26-4933 (ひきこもり相談窓口専用)

E-Mail : shc@city.tanabe.lg.jp

Hp : <http://www.city.tanabe.lg.jp/kenkou/hikikomori/index.html>

※ 保健所にも「ひきこもり」相談窓口があります。

田辺保健所 TEL 0739-22-1200 (代表) (平日9:00~17:45)



Ⅱ－１．相談実績

１．相談実績 令和元年度

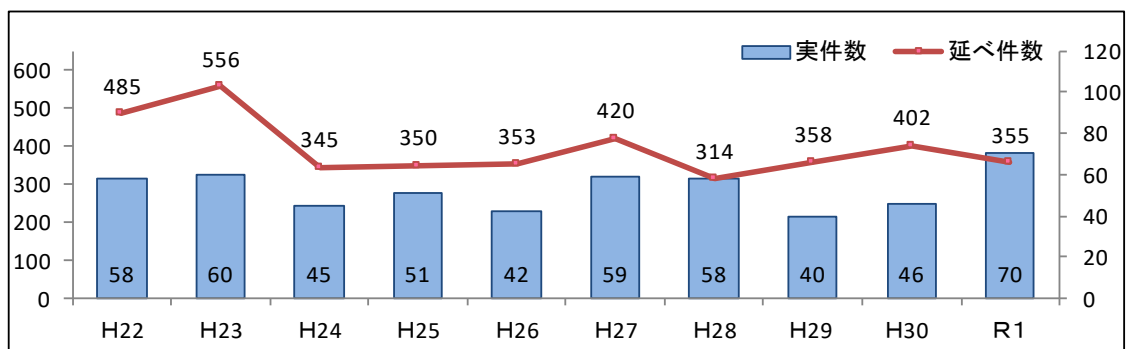
相談窓口開設以降、令和元年３月末までに 667 家族 695 件の相談がありました。
（内、令和元年度は 41 家族 42 件）

（１）年度別相談件数

平成 22 年度から令和元年度の 10 年間の相談実件数、延べ件数の推移を示しています。

令和元年度は、前年度に比べ、実件数は、増加しています。

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1
実件数	58	60	45	51	42	59	58	40	46	70
延べ件数	485	556	345	350	353	420	314	358	402	355



（２）平成 31 年 4 月～令和 2 年 3 月までの状況

① 月別相談延べ件数

相談件数では、来所相談が多く、次いで電話相談となっています。

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	上半期合計		
電 話	9	14	17	24	9	11	84		
来 所	13	14	16	15	12	12	82		
メー ル	0	2	4	6	1	1	14		
訪 問	1	6	1	3	4	5	20		
合 計	23	36	38	48	26	29	200		
	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	下半期合計	総 合 計	%
電 話	8	14	8	5	5	10	50	134	37.7
来 所	12	12	9	9	10	10	62	144	40.6
メー ル	1	2	3	4	2	3	15	29	8.2
訪 問	7	3	3	3	4	8	28	48	13.5
合 計	28	31	23	21	21	31	155	355	

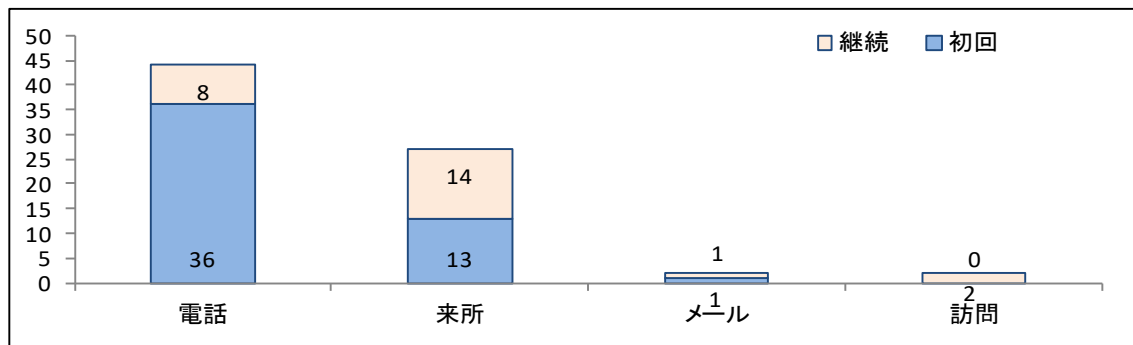
② 相談実件数

Ⅱ－１． 相談実績

相談実件数の内、初回は、電話相談が一番多く、次いで来所相談となっています。

	初 回	継 続	合 計	%
電 話	36	8	44	58.7
来 所	13	14	27	36.0
メ ー ル	1	1	2	2.7
訪 問	0	2	2	2.7
合 計	50	25	75	

※ まるめのために総計が100%にならない。

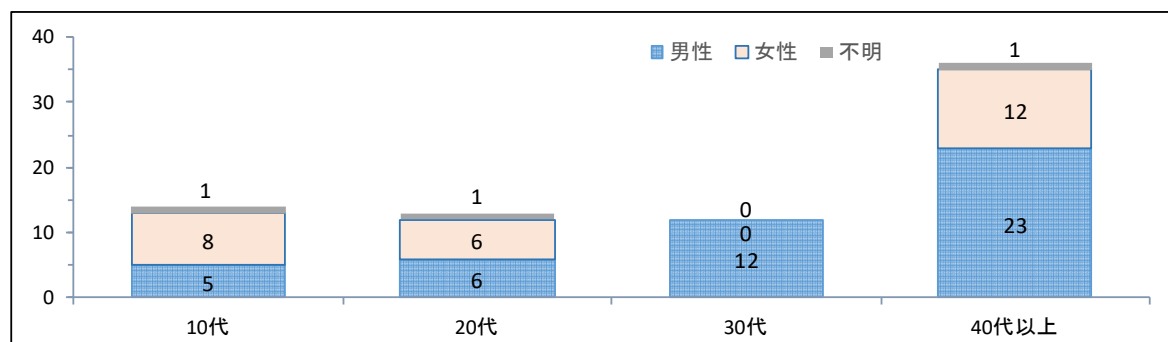


③ 年代別男女別件数(75 件中)

年代別に見ると、40代以上が一番多く、次いで10代となっています。

男女別に見ると、男性の方が61.3%と多くなっています。

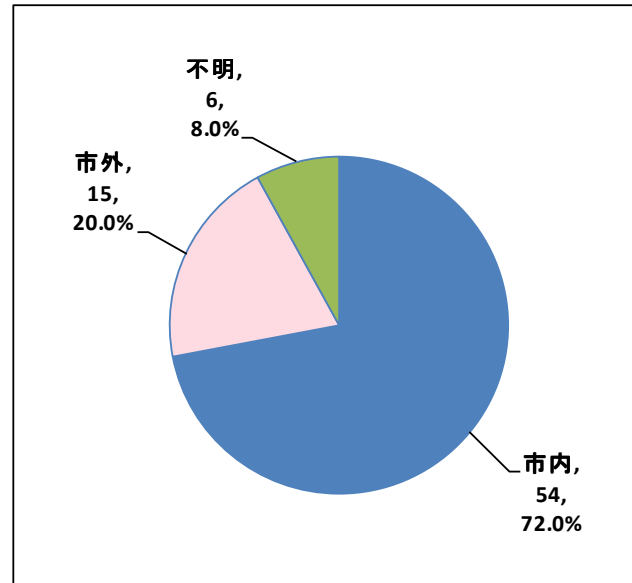
	10 代	20 代	30 代	40 代 以上	合 計	%
男 性	5	6	12	23	46	61.3
女 性	8	6	0	12	26	34.7
不 明	1	1	0	1	3	4.0
合 計	14	13	12	36	75	
%	18.7	17.3	16.0	48.0		



④ 居住別(75 件中)

居住地別では、市内が、72.0%となっています。

	人	%
市 内	54	72.0
市 外	15	20.0
不 明	6	8.0
合 計	75	



⑤ 相談結果(75 件中)

相談を継続する者が 33.3%、紹介が 2.7%、その他が 64.0%となっています。

	人	%
継 続	25	33.3
終 了	0	0.0
紹 介	2	2.7
そ の 他	48	64.0
合 計	75	

紹介

- ・若者サポートステーション
With You南紀(2)

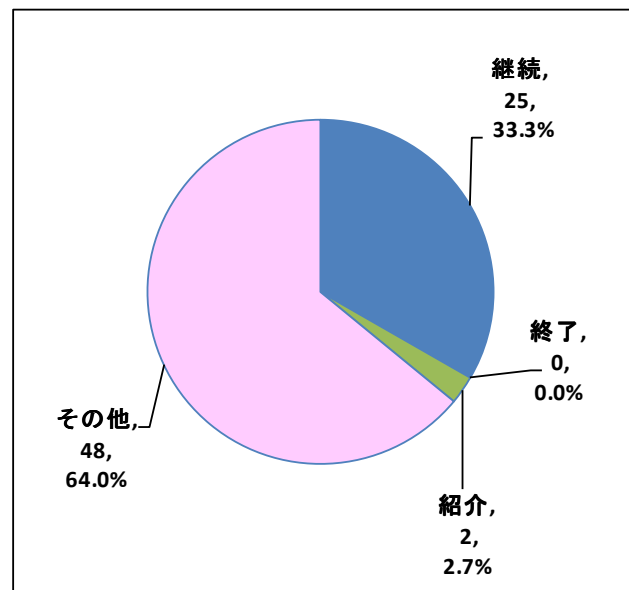
その他

3カ月未満の継続

- ・本人からの相談(4)
- ・家族からの相談(8)
- ・親戚からの相談(1)
- ・関係者からの相談(2)

1回のみ相談

- ・本人からの相談(6)
- ・家族からの相談(19)
- ・親戚からの相談(3)
- ・関係者からの相談(2)
- ・知人からの相談(1)
- ・友人からの相談(1)
- ・その他からの相談(1)



⑥ 初回相談者

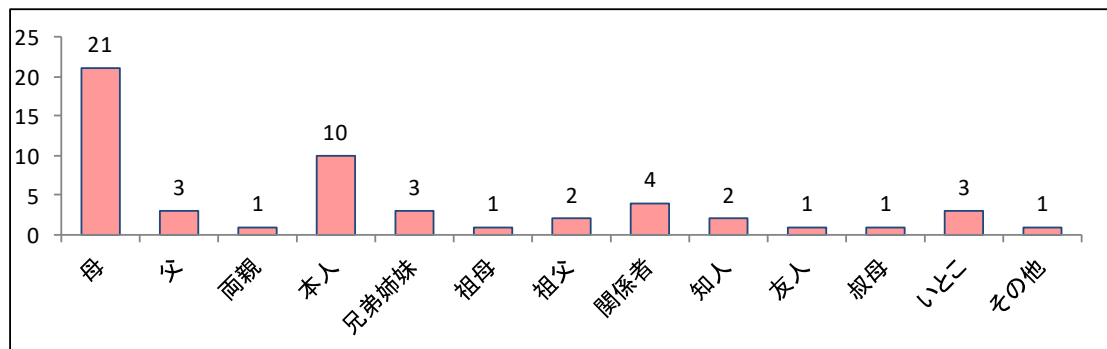
Ⅱ－１． 相談実績

初回は、母からの相談が多く、次いで、本人からの相談となっています。

	母	父	両親	本人	兄弟姉妹	祖母	祖父	関係者	知人	友人	叔母	いとこ	その他	合計
初回	21	3	1	10	3	1	2	4	2	1	1	3	1	53

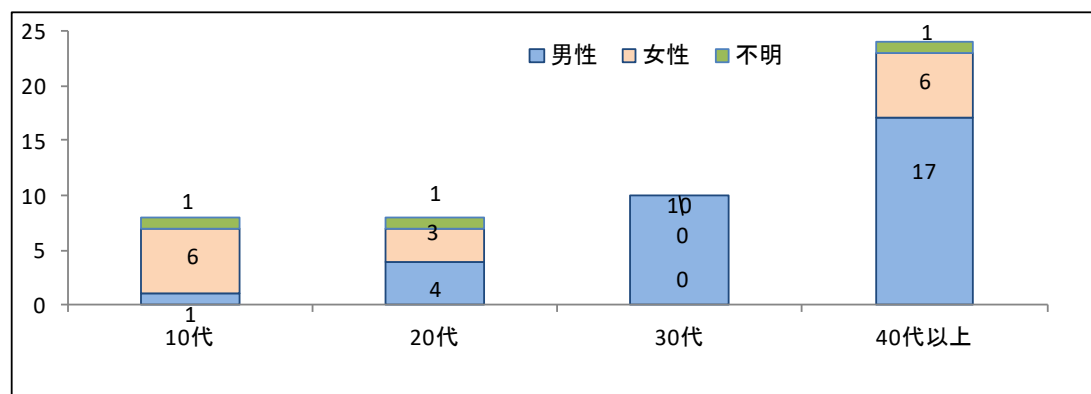
※ 初回は、3件が重複

内訳 親戚・関係者(1) 両親・関係者(1) 母・姉(1)



⑦ 年代別男女別件数(男性 32 件中・女性 15 件中・性別不明3件中)

	10代	20代	30代	40代以上	合 計	%
男 性	1	4	10	17	32	64.0
女 性	6	3	0	6	15	30.0
不 明	1	1	0	1	3	6.0
合 計	8	8	10	24	50	
%	16.0	16.0	20.0	48.0		



(3) 継続相談について

① 相談状況(重複あり)

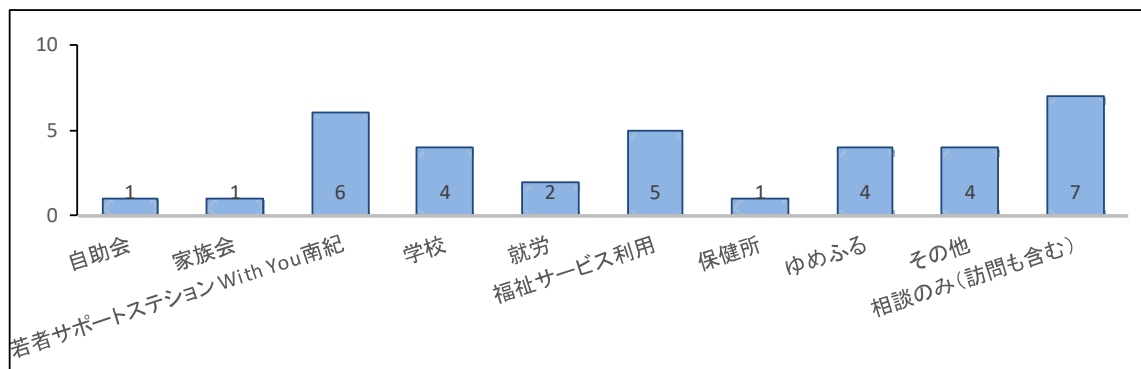
継続状況は、若者サポートステーション With You南紀が多く、次いで、福祉サービス利用となっています。

自 助 会	1
家 族 会	1
若者サポートステーション With You南紀	6
学 校	4
就 労	2
福 祉 サ ー ビ ス 利 用	5
保 健 所	1
ゆ め ふ る	4
そ の 他	4
相 談 の み (訪 問 も 含 む)	7

※ 相談のみ(訪問も含む)は、
ひきこもり相談窓口の相談のみで
自助会や他の支援を利用していない方。

※ その他の内訳は、
他府県ひきこもり支援機関(1)
ポラリス(1)
民間支援団体(1)
その他(1)

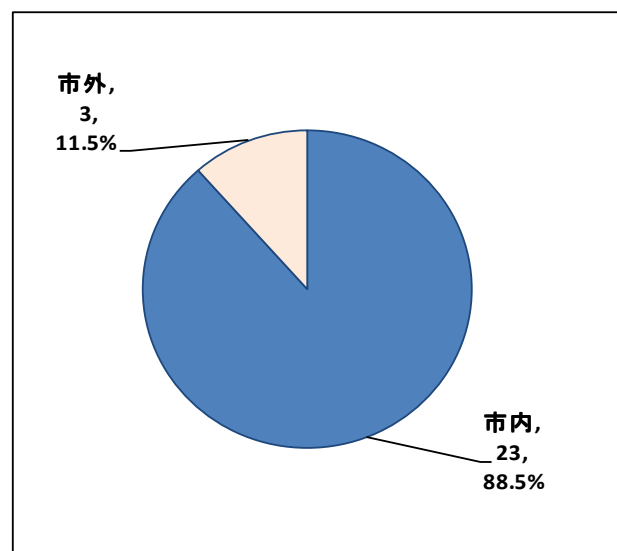
※ 医療機関を定期的に受診されている方は、10件。



② 継続居住別(26件中)

居住地別では、市内が 88.5%、市外が 11.5%となっています。

	人	%
市 内	23	88.5
市 外	3	11.5
合 計	26	

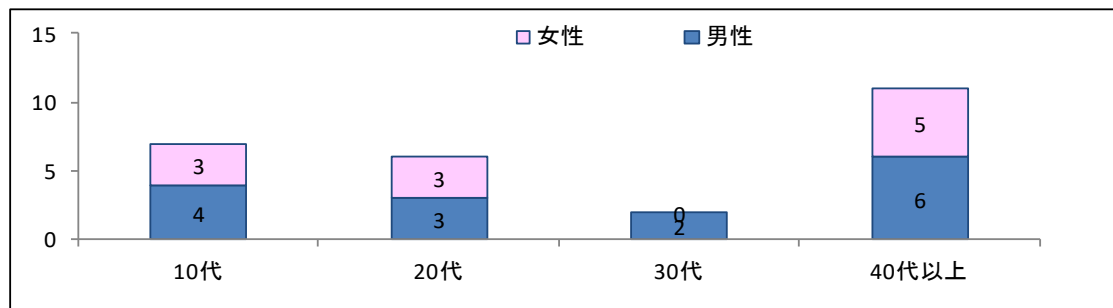


③ 継続年代別男女別件数(26件中)

Ⅱ－1. 相談実績

年代別に見ると、40代以上が多く、次いで20代となっています。

	10代	20代	30代	40代以上	合計	%
男性	4	3	2	6	15	57.7
女性	3	3	0	5	11	42.3
合計	7	6	2	11	26	
%	26.9	23.1	7.7	42.3		



Ⅱ－2. 支援の報告

(1) 家族会(原則月1回)

ほっこり会(紀南地方ひきこもり家族の会)実績

(平成16年4月より自主運営)

実施日	内 容	出席者				実数	参加家族数	対象家族数
		父	母	その他関係者	窓口			
H31.4.9	話し合い	0	2	2	3	7	2	4
R1.5.14	話し合い	0	1	1	2	4	1	
R1.6.11	話し合い	0	1	1	2	4	1	
R1.7.9	話し合い	0	1	1	2	4	1	
R1.9.10	話し合い	0	1	1	2	4	1	
R1.10.8	話し合い	0	2	1	1	4	2	
R1.11.12	話し合い	0	2	1	2	5	2	
R1.12.10	話し合い	0	2	1	2	5	2	
R2.1.14	話し合い	0	1	2	2	5	1	
R2.3.10	話し合い	0	0	0	0	0	0	

(2) 青年自助会実績(原則月2回)

実施日	内 容	出席者	窓口	
R1.11.15	工 作	1	2	
R1.12.20	ク リ ス マ ス 会	1	2	

(3) 啓発活動・視察・問い合わせ

○ 啓発活動

Ⅱ－２． 支援の報告

講演会案内チラシ配布
紀南六高校3年生、関係機関他
相談機関紹介チラシ配布
市内中学3年生、紀南六高校3年生

○ 視察

R 1 . 7 . 24	香川県 三豊市議会	8名
R 1 . 7 . 31	愛知県 安城市議会・知立市議会	4名
R 1 . 8 . 7	愛知県 岡崎市議会	1名
R 1 . 8 . 26	千葉県 聖徳大短期大学部	1名

○ 実習

R 2 . 2 . 5	愛知県立大学 教育福祉学部 社会福祉学科 教授 学生	6名
-------------	----------------------------	----

○ 問い合わせ

公明新聞社
日本経済新聞
三重県鈴鹿市 一般社団法人 COCORO
石川県白山市役所
埼玉県戸田市 市議会議員
三重県 津市 市議会議員
三重県 津市役所
紀伊民報社
神奈川県 大和市役所
山梨県 甲府市 保健所
愛知県 知立市役所
和歌山県 田辺市 市議会議員
大阪府 熊取町役場

(4) ひきこもり支援啓発講演会

主 催：田辺市ひきこもり検討委員会/田辺市/和歌山県子ども・若者支援地域協議会

共 催：若者サポートステーション With You 南紀
 後 援：認定 NPO 法人ハートツリー/田辺市教育委員会
 田辺市社会福祉協議会/田辺保健所/(公社)白浜・田辺青年会議所
 紀伊民報社/(株)和歌山放送/FM TANABE
 日 時：平成元年 10 月 19 日(土) 13:30~15:30
 演 題：「生きづらい若者たちのホンネ」
 ～ひきこもり当事者の声を通して本当に必要な支援を考える～
 講 師：松山大学
 准教授 石川 良子 氏
 参加者：100 名(ひきこもり検討委員・関係者・事務局含む)



【講演内容】

皆さん、こんにちは。はじめまして石川良子と申します。ほんとに今日はみなさんが移動してくる時間が、1 番どしゃぶりの時間で、他のところでもイベントも重なっていると聞きしている中、これだけ多くの方に来ていただいてほんとにありがたく思います。来てよかったなあというふうに、思っていただけのように一生懸命、お話しさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

和歌山には昨日到着して、早速、白浜の千畳敷にご案内いただいたあと地元の美味しいものを堪能して、午前中は熊野まで連れて行っていただきました。今夜は懇親会も開いていただけるそうです。先ほどご紹介いただいたように出身は神奈川で、いまは愛媛に住んでいるわけですが、愛媛のお魚もすごく美味しいんですけど、和歌山のお魚は本当にびっくりするぐらい美味しくて、夜が楽しみです。講演はいろんな所に呼んでいただくんですが、ここまで丁寧に親切に暖かく迎えていただいたのは、この田辺市がほんとに初めてで、これからがほんとのお仕事なんですけど、次、いつ遊びに来ようかなというようなことをもう考えています。

時間も限られておりますので、今日の予定に進みます。「予定は未定」というふうに書いているのはなぜなのか？というところですが、3 部構成で、今日はお話しさせていただこうと思っています。

まず第1部は、ひきこもるっていう経験をどんな風にまず理解したらいいのだろうか？支援するとか相手と関わっていくというようなところでは、やっぱり相手をちゃんと理解するというのが、大事になってくると思うんですね。なので、まずは、支援というようなものについて考えていく前に、そのご本人の経験というものをどんな感じで、私たちはとらえたらいいのだろうかという、その話をしたいと思います。

で、ですね第2部は、メニューⅠと、メニューⅡというふうにして、2 つメニューを用意しております。今、ここにいらっしゃる皆さんの関心がどっちにあるのかなというのを伺いたうえで、お話しさせていただこうというふうに思っています。こちらがこういう話がいいだろうと思って話をしても、やっぱりかみ合わないということが、今まで何度かありましたので、今、私が支援というところでお話しできることはこの2つ、ひきこもっているご本人と一体どんなふうにお付き合いしたらいいのか、どんなふうな心構えというか、関わり方をしたらいいのだろうかという、そういうお話を用意してきました。

2つ目が、ご本人と1対1の関係としてではなく、この地域、田辺市っていう、その地域の中でどういう風に支援することができるかというお話です。ひきこもりの支援の中では、居場所がすごく大事だということが繰り返し、繰り返し言われていますけれども、その居場所というものについて掘り下げてみたい、これが2つ目のメニューになります。

で、第1部を聞いていただいて、そのうえで途中、どっちがいいですかというふうに私が

お伺いしますので、その希望が多かったほうをお話ししようと思いますので、どっちの話を知りたいかなというようにちょっと考えながらね、最初の方は聞いていただければと思います。

で、第3部ですね、支援を考えるうえで信頼というキーワードを出して、それでしめというふうにしたいと思っております。

こんな感じで、3部構成で、3時10分くらいまでというふうに伺っていますので、1時間半弱お話をさせていただきます。

前置きが長くて申し訳ないですが、自己紹介を最初にしておきたいと思います。ひきこもりにかかわるようになったのは、2000年の年末からもう20年ぐらいですね、この辺りをウロウロ、ウロウロしております。

インタビューを中心にしてやっているわけですが、どういうところかというと首都圏ですね。東京・神奈川で活動している自助グループとか支援団体に、当事者として関わっている人を中心に、お話を聞いたりとか交流したりしてきました。

当事者として関わっている人という、ちょっとまどろっこしい書き方をしているんですけども、私はひきこもっている人と、当事者っていうのはちょっと分けてとらえるようにしています。ひきこもり状態にあるすべての人が、当事者なのではない、と。私がこの研究という立場で接点を持つことができる方っていうのは、ひきこもっている最中の人はずいぶん難しいわけですね。で、そうすると私が関われるのは、そういう色んな集まりに出てきている人、そういう人たちに限定されているということですね。ひきこもり全般のことをやっているわけではなく、あくまで自分自身の今の状況とか、いろいろな問題というようなものを、自分はひきこもりなんだと認識して、自分自身の問題を解決するためにどうしたらいいんだろうって言って、色々な活動に参加するようになった人。そういう人を、私は、当事者と呼んでいます。

だから、ひきこもっている状態であったとしても当事者ではない人もいるわけで、そういう意味では、私があつてきた人っていうのは、ひきこもりってぐられる大きな全体像は見えないですけども、すごく一部の人たちということにはなります。でも、そういうような限定された人達であっても、その人達との出会いから学んだこと、それを手がかりにしてどうやって色んな人と関わっていけるのかなっていうことを考えています。

私、しごく単純素朴な人間なので、ひきこもりっていったい何なんだろうっていうことを、ずっと考えてきました。でもそれは、ご本人がどういう経験をされているのかということですね。まわりから見て、ひきこもっている状態であるっていうので、「あの人は、ひきこもりだね」というふうに周りから指をさすような視点でやっていくのではなく、まず、自分自身でひきこもりなんですというふうに言っている人達を起点に置きたい。だからその中には支援団体とか、自助グループや居場所に通ってきている人もいて、「それならもう、ひきこもりじゃないじゃないか」とよく言われるんですが、周りから見てひきこもりかどうかではなく、まずご本人が、どう考えているか、どういう風に自分を見ているかというのを、大事にしたいと思ってやってきました。

それとセットになるのが、ひきこもりが回復するっていうのは、どういうことになるのか？つけたすと、そもそもひきこもりから回復するっていう見方自体がどうなのだろうか？というようなことも疑問符ですね。ひきこもりから、回復する。今は、就労がブームだというふうにされていますが、ホントに？っていう、そこに対する反発も当事者の方々の中では強かったりするわけです。回復っていう捉え方自体がちがうのかも？10年以上前になりましたが、博士論文を書籍化した時のタイトルを『ひきこもりの〈ゴール〉——「就労」でもなく「対人関係」でもなく』にしました。要は、社会参加なり、社会復帰できるかどうか？それが回復というふうには言えないんじゃないのか？私なりに考えるゴールと言うと、それはまあ1つ、もう周りが決めることではない。ご本人が、自分の人生に苦しみながらも、それでも納得できるかどうか、もがき続けることになると思うんですが、働けるようになったら、社会復帰したら、お金を稼げるようになれば、税金を納められるようになればOKという問題ではないというふうに私自身はひきこもりのことを捉えるようになりました。

それで自己紹介すると必ず、よくある質問というのがでてくるので、先にお答えします。「ひきこもった経験があるんですか？」とか、「なぜ、ひきこもりの研究をしているんですか？」と、質問が毎回出るので、先に答えることにしています。

私は、ひきこもった経験はありません。いわゆる身内に、兄弟とか、近しいところでひきこもっている人もいません。もう亡くなってしまった叔父ですが、今だったら、もしかしたら、ひきこもりと言われたかなあという、そういうような人がいないわけではないのですが、私自身は当事者の立場でもないし、家族の立場でもありません。

私自身も、実はいうと人間関係、あまりうまくやってこれた方とか言えなくて、色々悩みながら感じてました。今でこそ、こんな感じで人前に立って一応明るさを装って、お話をすることができるようになったんですが、全然、そんなんじゃないかったですね。だから、ひきこもりの当事者と自分が、かけ離れた存在だっていうふうには全く思えないというところでスタートさせました。たしか「ニュース23」だったような気がするんですけども、それで初めてひきこもりっていう報道に接した時に、あ、これ、私の問題だっていうふうに思ったのが始まりです。でも、私はひきこもらなかったよ。なんでだろう？そういう疑問も同時に抱きました。

で、ちょっと前に出ますが、私、今日、こんな格好をしているんですね。Tシャツにデニムで、これあの講演会の講師としては、たぶん、あり得ない格好をしているわけですね。でもこれは、TPOをわきまえないというようなことではなくて、一応、これは私なりの意図があって、あえてこれを衣装として選んでいるんです。

自分自身がすごく、こう苦しくて苦しくて、生きることが苦しくてしょうがなかった。今も苦しいんですけど。しかも私がずっと交流を持っている人っていうのは、生まれが1970年代ぐらいの人が大半で、ホントもう、同年代の人達だったんですね。だから、大学院に入ってはいましたが、先生と研究対象っていう、そういうような距離感ではなく、同じ目の高さ、同じところに立ってやってきたというふうには思うんですね。

だから、これ私がいつもひきこもりの集まりに行く時の格好をしているということです。私がどのようなスタンスでどういう距離感でもって、ひきこもりに関わっているのか、当事者の方々とお話しているのかを分かっていたくためには、この格好で出てくるのが一番わかりやすいので、あえてかなりラフっていうか、普段着で、いつも講演をするようにしています。あいつ非常識なっていうふうに、思われた方がいるかもしれませんが、これが私のひきこもりに対する関わり方ですと言うのをお話をさせていただいたうえで、本題に入っていきたいと思います。

で、同じ目の高さで立ちたいというか共感ですよ。私とこの人たちと同じだと言うところから始まったとはいえ、やっぱり私自身がひきこもったことがあるわけではないので、「なんだかんだ言たって、あんたはひきこもったことがないんだから、自分と同じだなんて仲間面しないでほしい」という、そこまで強い言葉ではっきり言われたことはないですが、そういう目線はずっと感じてやってきました。そうすると、ひきこもったことがない私が、今、目の前にいる人たちの経験っていうのをどんな風に受け止めることができるんだろうか。私自身がどういうふうに理解できるのか。もちろん同じような経験を持っている人同士でも別個の人間である以上、完全に理解するということは当然できないわけですけども、それでも経験の有無というのはやっぱり大きいと思うんですよ。それでも今は自分と地続きの存在としてひきこもった人たちを見ていて、そういうふうに立てるようになったのは、ひきこもったことのない私が一体どうやって皆さんと向き合えるのかっていうことを考えてきたからだと思っています。

そういうわけで、ここでお話しすることは、ひきこもりっていうのはこういうものなんですっていう一般的なことではなくて、私はこういうものとしてひきこもりを捉えています、こういう見方がありますけどいかがですか？よかったら皆さんもこういう見方を使ってみませんか？というような、提案みたいな感じでお話しさせていただこうと思います。

<ひきこもるという経験を、どう理解するか>

それでは第1部、ひきこもるっていうのをどう理解するかということで、ひきこもりのイメージと実際からお話していきますが、ひきこもりって、なんかこんなこういうイメージですよ。部屋の中に閉じこもっているイラストですけど、カーテンの隙間から光が差し込んでいるんで、昼間なんだろう。で、こういう暗い部屋の真ん中で体育座りをしている。なぜか、ひきこもりというと体育座りってイメージがあるみたいですね。で、その部屋の前には食事の載ったお盆が置かれていて、この写真ではハンバーグ定食ですけども、そこに「お願い、部屋から出てきて、今なら、まだ、やりなおせるから、お母さん。」という愛情のこもった、しかし、こう言ったら何ですが、恐ろしい手紙が添えられている。あなたのことを気にかけているよっていうメッセージをずーっと伝え続けることは大事だとは思いますが、内容によっては相手を追いつめることにもなる場合があるので、これはもらった側は追いつめられるんじゃないかな、と。このへんの話はまた後で出てきますが、ともあれ、ひきこもりっていうと自分の部屋の中に閉じこもって、いっさい家族とも顔を合わせない状態というイメージをされているわけです。

でも、そうではないということで、かなり前のデータになるんですけども、保健所の職員さんがひきこもりとしてカウントした相談事例が、どういう状態の人たちだったのかというものです。だから、これは実態ということではないんですが、私がひきこもりに関わってきた感覚と一致するデータなので、ずっと使い続けています。で、どういう状態がひきこもりの事例としてカウントされているのかという中身の前に、パッと見て分かるのはいろんな色が使ってあってカラフルだということ。それはどういうことかっていうと、ひきこもりと言えば家に閉じこもりきりで家族とも会わないっていうステレオタイプに当てはまるような事例ばかりではなくて、実際にはいろんな状態の人がいるっていうことです。ひきこもりは十人十色とか、人それぞれだとよく言われるんですけど、まさにその通りである、と。

さらにその内訳を見ていきますと、一番面積が大きい黄緑色で、「外出は可能」が 41%。で、その次に大きいのが水色で「条件付き外出可能」が 21%。だから、この2つを合わせると6割を超える事例が外出をしているわけですね。全然、家に閉じこもりきりってわけではない。しかもその次のピンクが 17%で、外出できないけど、おうちの中では自由に過ごしていますというような人たちもいるわけですね。最後にステレオタイプにあてはまるような「自室で閉じこもっている」は 10%ですね。あとは「友人とのつきあい・地域活動には参加」というのもカウントされていて、これはひきこもりなのか？っていう話になるんですが、それは想像するに、要はお金を稼いでいないということが、ひきこもりとしてカウントされているんだろうなと思います。でも、いずれにしても、閉じこもりきりの人たちばかりではない。本当にいろんな状態の人がいて、人に全然会えないわけでもない、全然出たがらないわけでもない、そのことを最初に確認したいと思います。

ただ、十人十色、人それぞれなんですっていうふうに言ったら、それはその通りなんです。当たり前なんです。でも、そこをもうちょっと整理して考えることはできないか。共通点みたいなものを少しでも取り出せないか、ということで「条件付き外出可能」というところに注目してみます。「条件付き」の「条件」とはどういうものなのか？どうやら自由気ままに動いているわけではないらしい。じゃあ、出ていけるっていうのと、出て行けないっていう、その線引きはどこにあるんだろう？どういう人だったら会えるのかな？そこを掘り下げてみようということで、「ひきこもりあるある」を出してみました。

いろんな人の話を聞くと、行けるところと行けないところが共通しているなと思うんですね。よく聞くのが外出する時間帯で、深夜はOKだけれども昼間は無理ですという話、これ、よく聞くんですよ。で、お店でも、本屋は行けます。ブックオフはひきこもりの聖地だなんて話もありました。図書館もけっこう行ってたって聞きます。でも、床屋さんと美容院とか洋服屋さん、これが行けなかったという人がすごく多いですね。あとはコンビニでも頻度によっても

変わってくるっていう話を聞いて、たまに行くコンビニだったらOKなんだけれども、よく行くコンビニになっていって、スタッフの顔を覚えちゃうと行きにくくなっていくという人がいたり。分かりやすいところでは、飲み会でも「ひきこもり」のグループでの飲み会やるんだったら遊びに行けるんだけど、ひきこもる以前の友人との飲み会は無理なんだよねっていう人が大半。

こうやっていろんな話を聞いていると、パターンみたいなものが見えてくる。この行ける所と行けない所、あるいは行ける時間帯と行けない時間帯とか、あとは頻度もそうですね。行ける行けないの間には何らかの線があるわけで、この線はなんなんだろうかということを考えてみたいんですね。で、せっかくですから、インタビューをしてご本人から聞いた話をもとに、どういうふうに区別されているのかっていう話をさせていただきたいと思います。

家族の中で、家庭では自由に過ごしているという人達がいいますが、そのおうちの中で誰としゃべれるのかというときに、兄弟で、すごい仲が悪かったという人もいれば、兄弟との仲はすごく良かったという人もいますし、お父さんとは話ができるんだけど、お母さんがダメ、あるいはお母さんは大丈夫だけど、お父さんはダメ。あるいは両親がダメとか。家族の中でも関係性が様々あるみたいです。

今回紹介する人の場合はお母さんがOKで、お父さんがダメだったって言うんですね。それは何が違ったのかというと、お母さん自身もちょっと精神的に悩んでいたことがあったらしくて、そういう経験に照らして、見守っていきこうというか様子を見ようというような感じだったので、おしゃべりとかも普通にしていたそうなんです。ところがお父さんはもう本当に息が詰まる。帰って来ると実際に呼吸がしにくくなっちゃうっていうぐらいにすごく嫌だったって言うんですね。それは何でかという、ふと思ひ出したように「どうするんだ。バカ野郎」みたいな感じに詰め寄ってくる。自分を責めるし、追いつめてくるから嫌だったって言うわけですね。

つまり、自分が追いつめられる、そういうコミュニケーションが嫌だったということですね。だから、父親だから嫌なんだ。母親だから嫌なんだ。そういう立場がどうこうじゃなくて、その相手とどういうやり取りが行われるのかっていう、そのところで関われる・関われないっていう違いがあるんだ、と。ただ、どういうコミュニケーションが父親との間にあったのかどうか、それもあるんだけど、どうやら父親の存在そのものもきつかったらしい。それは何でなのか。

この人は大学を卒業する時にどうしても就職活動がうまくいなくて、内定が取れなくてひきこもっちゃったそうなんですけど、じゃあ、いつぐらいからお父さんと話すのがきつくなってきたのかというと、就職活動をするようになったくらい。そのぐらいから父親の存在を意識しないわけにはいなくなってきたと言っている。それは何でかっていうと、大学を卒業したら一般的なコースは、そのまま社会人になるものなんだ。だからそういうコースに乗れなくなったとき、どういうふうに生きていったらいいか分からなくなってしまって、それで、ひきこもったという話なんですけど、そういう一般的なコースっていうのを歩むものなんだ、歩まなければいけないんだっていうふうに考えると、父親はそのコースを歩んでいる人である。だから、比べちゃう。男の人っていうのはこういう人生を歩んでいくものなんだっていう、そういう規範意識というやつですね。こうであらねばならないという意識が強い。そうすると、お父さんは自分ができなかったことをちゃんとやれている人、だからものすごくコンプレックスを刺激される。だから辛かったって言うんですね。

じゃあ、お母さんがどうして大丈夫だったのかっていうと、やっぱり女性と男性では求められる人生のありようが違うからだって言うんですね。母親はこちらの様子を見るといった姿勢で接してくれたというのもあるけれども、そもそも、自分の歩むコースとは違うコースを歩んでいるから、そこで劣等感を刺激されるっていうことはない。でも、父親はコミュニケーションの仕方としても追いつめてくるし、もう、その存在自体が非常に自分にとってはきつい。だから、この人の場合には、お父さんが嫌だった。というわけですね。つまり、コミュニケーションのあり方として、ぐいぐい詰め寄ってくるというような自分の苦しさがどんどん膨らんじやう

ようなコミュニケーション、あるいは、自分はいかならなければならないというところから見てコンプレックスが刺激されてしまうという規範意識の問題ですね。常識とか価値観とかの問題ですね。そういうものも関わっている。

さらに、じゃあ親だからダメなのかっていうとそうでもなくて、何がイヤなのかという「なんで働かないの？」と聞かれるのがイヤだった。「これからどうするの？」って聞かれるのもイヤ。「今、何やってんの？」って聞かれるのもすごく辛かったって言うんですね。ひきこもっている間は何でこんなことになっちゃたのかなってというのが自分でも分からなくて、ものすごく混乱していたから「今、何やっているの？」って聞かれること自体がすごくきつかった。自分でも、それが分からないから厳しいのにつて。で、今のことも分からなければ当然「これからどうするの？」ってということにも答えが出ないわけですよね。で、ましてや「何で分からないのって？」っていう直球ですよね。それも非常に辛い。自分でも何でこうなっちゃってるのか分からない、それが苦しいという核心に触れてくる質問なので、それを聞いてくる人は全部イヤ。要は具体的な相手じゃなくて、そういう自分の葛藤をより強めるような働きかけをしてくるっていう、そこがイヤだったんだっていうふうに言うわけですね。

だから、そういうようなことを触れられたくないから、友達に会うのをやめる。親ともなるべく話をしないようにする。結果、対人関係がどんどんなくなっていくわけですがけれども、何でそうなるのかって言ったら、結局は自分自身がすごく追いつめられていて、精神的な苦しみもさらに大きくなっちゃう。そういう状況を、避けよう避けようってやっていくと、ひきこもることになってしまうんだ。そういうふうに説明を付けることができるわけです。

そうやって見てみると「ひきこもりあるある」も分かりやすく、たとえば本屋と床屋と美容院のちがいは何かというと、店員さんとの間に世間話があるかどうかというところ。床屋と美容院って私も実は苦手なんですけれども、平日の昼間に行ったりすると「お仕事、お休みですか？」とか聞かれるわけです。それとセットの質問が「今、何をやっているんですか？」というやつですね。これ、大学院時代は特に苦痛でした。普通だったらみんな働いているような時間帯に髪の毛を切りに行くから、すごい美容師さんに不思議がられるわけですね。「お仕事、お休みですか～？」って言われて「休みっていうわけでもないんですけども」とか答えるんですけど、そうすると「じゃあ、何されているんですか？」って言われて、大学院の頃は、この先就職できるかどうか分からない、自分でも先行きが見えないっていうところにいたから、「何やってるんですか？」とか聞かれるとすごいつらい。大学院生という立場があった私ですら、そういう世間話、すごい大変なんですよね。そこで話をつなげるのもちょっと強引かもしれませんが、さっき言ったように自分がどういうふうな状況にあるのか、自分でも理解できていないっていう、そういうものすごく混乱の中にある時に「今、何されているんですか？」っていうふうに聞かれれば、その質問ってものすごく凶器ですよね。相手からすると何気ない世間話なんだけれども、その世間話が非常に追いつめるものである。だから、そういうような世間話をしなきゃいけないような所には行けませんって、そういうことらしいんですよね。

じゃ、深夜の外出、昼間の外出はどうなのか。ひきこもりの特徴として昼夜逆転ってよく言われますよね。不規則な生活を送りがちなので、そのところを規則正しい生活に戻して、働けるようにしていきましょうみたいな、まあ、かつての若者自立塾ですよね。共同生活しながら規則正しい生活に戻していく。でも、昼夜逆転を単純に生活の乱れとして矯正するのは違うんじゃないか。深夜と昼間の違いっていうと、もちろん夜にお仕事されている人たちもたくさんいますけど、それでも社会って基本的には昼間はオンで、夜はオフなんですよね。だから、オンの時間帯に出ちゃうと、学校に行けません、人と関わられません、働くことはできませんっていう、いわゆる社会参加なるものがない自分がすごく際立ってしまう。だから辛い。でも、夜だったら社会がオフになる時間帯だから、少し出られるし、人目も少なくなるしという、そういうところなんじゃないでしょうか。つまり単に生活が乱れているということではなくて、自分自身の苦しさ・コンプレックスっていうところで昼夜逆転にならざるを得ないんじゃないでしょうか。

いろんな方にお話を聞いていて、行ける所と行けない所の線引きがどうなっているのか、どういう人だったら関わられて、どういう人だったら関われないのかっていう線引きは、ひきこもっている苦しみが刺激されそうだったり、激痛は走らなさそうだったり、そういう場所や相手、シチュエーションを選んで行動しているんだっていうことが分かってきました。当事者の方々は、すごく苦しい中でもどうにかこうにかやれることはないだろうかってサバイバルしてるんじゃないか、そういう見方をするようになりました。

それで逆に言えば、ひきこもっていることが激痛にならない。そういうコミュニケーションが当たり前のところであれば出られるわけです。「なんで、ひきこもりの集まりには行けるんですか？ひきこもりの集まりには行けてるんだったら、もう、それは当事者って言えないんじゃないですか？」っていう質問がよく出ますけれども、でも、行けるところは極めて限定されていますよね。自由度はものすごく低いですよ。本人の根性とかやる気の問題ではなく、ひきこもっていることを責められないとか、そのことで自分がコンプレックスを感じないでいられるとか、そういう場所を増やしていくことが必要なんじゃないでしょうか。

ここからインタビューに戻りたいんですけども、じゃあ何でひきこもっていることが苦しいのか。「何やってるんだ」って父親が責めてくるって言ってますけど、誰が1番自分を傷つけているのかっていうと、親だったり、職場の人だったり、世間一般の人だったり、そういうように見えるけど、でも本人からすると「自分を一番攻めているのは自分自身なんだ」と言っている。ひきこもっている人たちは、どうも自分から進んで堂々と開き直ってひきこもっているわけではない。少なくとも自助グループとか支援団体とか、そういうような所に出てくる人たちは、自分で自分のことを「こんなことをやってちゃだめだ、だからどうにかしなきゃ」っと思って出てきているわけですよ。ひきこもっている人が決して、自ら進んでひきこもっているわけではない。むしろ、「ひきこもりこもりたくない、こんな自分はダメだ」と思っていることがすごく伝わってきます。

だから、こういう風に話した人もいたんですけども、なるほどなと思いましたね。「『何やっているの』ってすごく嫌がる人もいるけれども、それに対して『遊んでるよ』って言えばやう人達はひきこもっていないでしょ？」と。「ひきこもってるんだよ」って軽く言えたら、ひきこもらないで済む。ひきこもっていることが、その人にとってはそれほど辛いことではないのであれば、本人は苦しくないのであれば、心穏やかに過ごしていけるのであれば、まあ、周りがどうこう言うっていうのは、ただのお節介りということになりますよね。

ところで 8050 問題のお話。今日は全然触れないんですけども、川崎の事件の加害者ですが、自分はひきこもりではないって言っていたという報道がありますけれど、わざわざそう言ったっていうことは、逆に自分の中でひきこもりだなんて思ってたんじゃないでしょうか。そういう自分が嫌で嫌でしかなかった。そこに 8050 問題というキーワードが報道で出るようになって、彼は確か 51 歳でしたよね。だから、「自分は 8050 問題の当事者なんだ。自分の未来はもうないんだ。」そういう絶望、孤独がああいう凶行に走らせたのではないかと想像してしまうんです。もちろん、どんなに絶望しているからといって、孤立しているからといって、人の命を奪っていいっていうことにはならないんです。だから彼のしたことは決して許されてはならないことではあるんだけど、でも、ひきこりが悪いっていうのは、その人個人が勝手にそう思っているのではなく、社会が「ひきこもりが悪だ、あつてはならないものだ」っていう見方をしていて、だから、自分はダメなんだ、もうおしまいなんだっていうふうになってしまったということなんだと思うんですよ。

だから、あえて言えば、ひきこもっているっていうただそれだけのこと。働かないっていうこと。ただそれだけのこと。人の価値とはそんなところでは測れないはずなんですけれども、でも、ただそれだけのことが、人の命を奪ってしまうところまで追い詰めてしまうことが問題なんじゃないか。その次に練馬で、お父さんが息子さんを殺しちゃったっていう事件がありましたけれども、ひきこもっていることで命を奪われるっていうところまで、ひきこもりが絶望的なことになってしまっていて、あつてはならないことになってしまっている。そういう世の中が、実は問題なんじゃないでしょうか。

だから、8050 問題っていうようなところで考えなければいけないことは、当然、お金どうしていきましょうとか、安心して安全に暮らせるような仕組みをどうやって作っていきましょうとか、お金をどうやって生み出していきましょうとか、お金というものを必要としないやり方はないだろうかとか、色々ありますけれども、そういうことを考えていくのも一つ。でも、それと同時に、そこまでの絶望とか、自分があってはならないものなんだって追いつめるような、そういう私達の常識とか価値観っていうもの、これをやっぱりどうにかしていかなきゃいけないんじゃないかって思うんです。この価値観の問題と仕組みの問題は絡み合ってるわけですけども、私が今ここでみなさんにお話ができるのは、その価値観どうしますか？私に何ができるんでしょうか？皆さんに何ができるんでしょうか？っていう、そのお話を今日はさせていただいています。

「人間は働くのが当たり前」っていう価値観があるから、「働いていない人間っていうのはクズだ」「働いていないお前は価値無し」って自分で思っちゃうんです。だからすごい辛いんです。「働いていないなら、お前価値無し。自分はクズだ」っていう、もう本当に苛烈な自己否定とか自己嫌悪、そんな言葉ではちょっと片付けられないような思いを抱えて、過ごしておられる。そこで思うのがひきこもりって、社会に出てこないから反社会的っていうのではなくて、当事者の人たちって極めて全う、全うすぎるって逆に思うんですね。「人間は働くのが当たり前だ」っていうのは、世の中の常識っていうやつですよ。色んな常識がありますけども、そうすると極めて常識的なところから、この人は自分を責めている。そういう意味では全うじゃないですか。常識的過ぎるがゆえに身動きがとれなくなって、苦しくなっちゃったということなんだろうな。そうすると、ひきこもりの当事者の人達っていうのは、なんか結局は、自分でひきこもっているのではなくって、そういった世の中の価値観・常識によってひきこもられているっていうふうに見た方がいいんじゃないかって思うんですね。

ひきこもっているのではなくて、ひきこもらされている。そしたら、こういうひきこもらせる社会っていうもの、それを見直していくことが大事なんじゃないか。じゃあ、ひきこもらせる社会がどういう社会かって言えば、ひきこもりは悪ですという、そういう価値観が支配的な社会ですね。たとえば「人間は働くのが当たり前」という価値観。あとは「友達が少ない人は不幸だ」っていう価値観もあるんじゃないかなって思うんですね。小学校に上がる前に、おそろしい歌があるじゃないですか、皆で歌わせられる「友達百人できるかな、1年生になったら、1年生になったら」って、こわいんですあの歌。すごく。いなくていいんです、そんなにいっぱい。友達百人いなかったら幸せじゃないんですかって思うんですけど、ああいうような歌を歌って、すりこまれていきますよね。だから、人と関わらないっていうようなことは、もう生きてても何も価値がないことなんだ。そういうような見方になってしまうわけなんですね。

でも「本当に？」って。働いているかどうか。お金を稼いでいるかどうかっていう。ただそのところだけで、人間の価値をはかるようなそういう物差しの在り方って、どうなんですかって思うんですね。人はいずれそうやって働いて稼ぐっていうことができなくなっていくわけで、そうすると、じゃあ高齢者はお荷物なんですかということにもやっぱりなるし、なんか非常に息苦しい。障害者を否定する社会っていうのも同じですよ。お金を生み出すことができない。そういうような人達は社会のお荷物でしかない。だから多くの人をひきこもらせているような社会っていうのは、他でも多くの人達が苦しむ。でも、人はいずれ老いていくし、何がどうなって自分が働けなくなるのかも分からない。体の問題があるかもしれない、気持ちの問題もあるかもしれない。安心・安全に働くことができない。そこ、問題なんじゃないかなっていうふうに、私自身はすごく思うんです。

あとはトライアンドエラーが許されないっていう余裕のなさがあるなって思うんですね。これは私が大学教員として学生さんに関わっていてすごく感じる事なんですけど、みんな就職活動がすごくつらそうなんですね。ものすごく追い詰められている。最近は何世帯の人の大量の定年退職があったりして内定が取りやすくなったんですけども、ほんとに余裕がない。可哀そうくらい。なんでそんなに余裕がなくなっちゃったのかって言ったら、今、大学を卒業する前のこの時点で就職先を見つけることができれば、自分はもう正社員になれない

んではないかな？一生フリーターだろうと、そういうふうな危機感ですよ。

でもそこで、いつだって働きたいっていうふうに思って、就職したいっていうふうに思った時に、いつでも労働市場に入っていけるような仕組みがあったら、彼らはそれほど追いつめられないし、もうちょっと余裕をもって色々な経験をしてみようという可能性も思い描けるかもしれない。でも、今の新卒卒っていうものから外れてしまったら、もう自分の人生終わりだっていうところまで思い込んでしまっているような気がするんですね。それって、やっぱりトライアンドエラーが許されない、そういう仕組みの問題でもあるし、トライアンドエラーが許されないっていうふうに思っちゃう私たちの意識の問題、価値観の問題でもあると思うんですね。

失敗するっていうことは、ピンチはチャンスっていう言葉があるように失敗したからこそ、だからこそ、挫折したっていうことがそのあとの大きな糧になったっていう経験、皆さんもってらっしゃると思うんですね。だから、ひきこもったとしても価値ある体験になるかもしれないという、そういうトライの機会が開かれていれば、もしかしたらひきこもるっていうことは、そんなに深刻化しないかもしれないという気もしてしまう。ただ、トライアンドエラーが許されない私たちの意識の上での余裕のなさであるとか、余裕なさを生み出してしまっている社会の仕組みであるとかいう、そういうようなものが多くの人をひきこもらせているのではないかと考えるようになりました。本人の問題じゃない。個人の問題ではないんだ。それはひきこもっているかどうかという経験の有無の違いというところでもない。ひきこもりの問題を通して見えてくるのは、私達自身の余裕のなさであったり、そういう余裕のなさを生み出してしまっている社会構造的な問題っていうようなもの。そういうことが見えてくるんだなっていうように思うようになったんですね。

で、ひきこもりをどう支援するかという話につなげていきたいんですけども、ここで見方を変えなきゃいけないと思っていて、ひきこもっている人が被害者なんだという見方。これはちょっとちがう。社会がひきこもらせているとなると、まるでひきこもっている人が被害者だっていうふうな話になっちゃうんですけども、でも、ひきこもっている人自身が、当事者自身が、自分のことをそういう世の中の支配的な価値観でもって攻めているんだとなると、実は、ご本人がご本人にとって加害者であるというような見方もできるわけですね。だから、ひきこもっている人っていうようなのは被害者である。救済してあげなきゃいけないとかそういうようなことではなくって、やっぱりひきこもっている人自身も、自分自身に対する否定的な見方と、どうにか折り合いをつけていくようにやっていかないとはいけない。周りが何か色々してあげればどうにかなるという話ではないところもある。

それに被害者というふうに見てしまうと可哀そうで無力な人っていう見方がくっついてくる。それは違うんじゃないか。ひきこもっている人はひきこもっている人で、当事者は当事者で自分なりに何とか生きていけるようにサバイバルしているという言い方をしましたが、そういう意味では、ちゃんと自分で生きていける人なわけですよ。そういうようなところがちゃんとある。意外にしたたかだったりするところもある。そう考えてみると無力で可哀そうな人っていうふうにしてしまうっていうのは、ちょっと難があるなあとと思うんですね。これは最後の結論のところに結びついていきます。

あとは、ひきこもりをどう支援するのかっていうことを考えていくときに、ひきこもっている本人をいじくるみたいな訓練を施すとかですね。就労訓練やろうとか、SST(ソーシャルスキルトレーニング)をやろうとか、そうやってひきこもっている人、本人を矯正して訓練に行かせて、それで周りに適応させるっていうようなこと。これは違うのではないかな。もちろんできることが多い方がいいかもしれないけれども、でも、本人ができるようになったからと言って、ひきこもりというのは悪なんだっていう、そういうような世の中、ひきこもっているっていう、ただそれだけのことが人の命を奪い、命を奪われてしまうという、そんな世の中に行ったら、誰でもひきこもっちゃうってことになりませんか、と思うんですけどね。本人が変われば良いではない、そうではない。

矯正という言葉を使うんだったら、むしろ矯正されるべきは、多くの人をひきこもらせてしまう社会の方なんじゃないんですか。で、その多くの人をひきこもらせてしまう社会という

のは、ひきこもっているかどうかの違いに関わらず、すごく、ものすごい生きづらさ、ものすごいプレッシャー、ものすごい抑圧を生み出している。そういう社会ではないでしょうかという。じゃあ、どんなふうに社会を変えていくのかっていうときに、さっきも言ったように 8050 問題に対処していく仕組みをどうするかっていう、そういうような話もできます。でも、私がするのはそういう話ではなくって、社会というのは、私たち一人一人が社会を作っていくわけですから、社会を変えましょうっていうときには私がどう変わればいいのか？変わるっていう言い方もちょっとプレッシャーがあって嫌ですけど、私が私として、どうやって生きていけばいいのかって考え直してみるとか、そういうことが社会を変えるっていうことにつながるんじゃないかなと私自身は信じています。なので、ひきこもらせる社会を矯正しましょう、じゃ、何が私達にできるでしょうかっていうことを考えてみたいのです。で、それを考えるところで、さて、メニューのどちらかを選んでください。

ひきこもる人たちの存在をどう受け止めるのかという、1対1関係についてどうなのかという話をするのか、地域で、ひきこもっている人達が出て行きやすい所、出て行きにくい所、それが苦しくない所だったら出ていけるんだってなるんだったら、そういう居場所ってどう作っていったらいいんでしょうかっていうそういう話にもなるわけですね。というわけでⅠかⅡ、どちらにしましょうか？Ⅰが多いですね。じゃあ、ひきこもる人の存在を、どう受け止めるのか？というお話をしたいと思います。

＜ひきこもる人の存在をどう受け止めるか＞

ひきこもりに対してネガティブな印象や感情を持っている。あるいは持ったことがある。あるいは全面的にそう思っているわけではないけれど、でも、やっぱり自分でもそう思っているところがあるなって、どうですか？私はあります。ありました。今はそんなことはないです。でも、10 年くらい前までは、この人達こんなにひきこもりの集まりでは元気にやってるのに、バイトできないのかなとか。もどかしいとか、なんかイライラするとか。実は私は思っていました。共感しなきゃいけない、受容しなきゃいけないというふうに言われるけれども、でも、どうしても、そういう気持ちっていうのは持ちちゃうものだと思うんですよね。でも、それはそれでいいかなっていうふうに思わないと苦しい。じゃあ、なんで、そんなにひきこもりに対してネガティブな気持ちっていうのが出てきちゃうのかなっていうのを、ここで考えよう。

自分がそういうふうにイライラしているのに、それを隠して表面上ではニコニコして「あなた達の気持ちはよく分かるよ」とか言って、当事者の人達と関わっていたら、すごく不誠実な人間だなと思うんですね。そういうようないやらしさって相手にも伝わるし、何より自分が非常に大変なので、そんなふうに思っちゃってるなっていうことは自分で認めてあげようというふうに思ったんですね。認めたらうで、でも、そのネガティブな感情をそのままにしておくのはやっぱり良いことではないので、自分が苦しいし、相手に対してもっとちゃんとまっすぐ向き合いたい、向き合えるようになりたい。そのために、まずは自分自身の感情とお付き合いできるようにならなきゃいけない。なんでそんなに怒ったり、イライラするのかなっていうことを色々考えてみると、まあ少なくとも4つくらいのパターンがありえるかなと自分で分析をしてみました。

1つが、「何を甘っちゃろいことを言っているんだ」。親御さんとかにありがちなかなと思うんですけども、自分自身の常識と価値観っていうようなものから見て、自分はこれだけ苦労してきた、それでも今こうやって何とか生きているんだから、あなたは甘ったれているんです。と、こういうようなタイプですよね。それが1つ。

これも親御さんとか、私は学生に対してあるんですけども、相手を心配するあまり、「いつまでそうやってるの」って怒ってしまう。心配しているんだったら「あなたのことが心配です」ってそこで止まっとけばいいのに、なぜか怒ってしまう。「いつまでそうやっているの」と、私も、だから、卒論の指導とかね。学生にやるんですけども、何にも進まない子がいると、

すごい心配なんです。で、心配なんだけど止まらないで「いつまでそうやってウダウダ、ウダウダやる気をださないでやっているのか！！」って怒ってしまうわけですね。貴方のことが心配なのによって、そのところをストレートに伝えられたらいいのに、それが怒りにつながってしまう。

あとは私だって苦しいのに、これは学生さんから聞くことが度々あって、それからネットの書き込み。ひきこもりに対して「どうせ死ぬなら一人で死ね」というようなひどい書き込み、ああいうものから見え隠れするものですけれども、自分はすごく苦勞して今やっているのに、あんた達はひきこもってて、親の金でこのうとうとひきこもっている。なんて羨ましい。実はそこだったりする。自分はこんな苦しいのに、なんであなた達は樂をしているんですかっていう、でも、よくよく考えてみるとあなたが苦しいのはひきこもっている人がいるからじゃないよね。八つ当たりだよって。あなたが苦しいのは、色んな理由があるでしょう。色んな事情があるでしょう。お察ししますっていうところもあります。だけど、だからと言って、ひきこもりの人を攻撃していいっていうことにはならないよね。そんな八つ当たりは、止めないっていうふうに思うんですよね。

最後、とにかく不可解。私はそれでした。とにかく分かんないんです。人と関われないけど働きたいとか、そういうようなことを言っている人が多かった。たぶん、こちらでもそういうお話、すごくあると思うんですね。でも、そういうふうに言っているのに、じゃあなんで動かないの？なんで？なんで？って、そういうふうに思っているんだったら、頑張ったらいじゃん。そういうところですよ。だから、イライラするんですよ。でも、大事なことはですね、働きたいとか、人と関わりたいとか、色んなことを言っているけど、それでも動けないっていう、それがその人の姿なんですよ。ありようなんですよ。言葉で何を言っているか、意識してどう思っているかではなくて、目の前のこの人を見ると、とにかく動けないですよ。それが何でなのか分からないからイライラしちゃうっていう。

じゃあ、そこでやってみなきゃいけないことは、何で動けないのかっていうことをちゃんと分かってみるのかなと思ったんですね。何でそんなに動けないんだろうっていうことを改めて、これは考えなきゃいけないな、教えてもらわなきゃいけないな。でもね、困った時に何で動けないのかっていうことが、やっぱり、ご本人もよく分からないらしいですよ。言葉にしがたい。何で動けないのか分からない、なんだ？なんだ？っていうことになるわけですよ。

そうすると、本人ですら分からないものを、ひきこもったことのない私がどうやってわかることができるんだろうかという話になるんですが、受容も共感もいらないやって、一旦、自分に諦めました。共感しなきゃいけないとか、受容しなきゃいけないとかなるけど、ど～しても共感はできない。で、動けないということも、ど～しても想像はできない。だけど、なんで動けないのかなという、その理屈とか道筋っていうのは納得がいくという、ここまではもっていけるかなというふうに思ったんです。要は、腑に落ちるっていう、そういう感覚になれたらいいのかなって。

本人たちがそうやって説明をしているわけじゃないけれども、でも、そうやって考えれば、ああ納得がいくねっていうふうになれたら、ひとまず、私のこのイライラやもどかしさはなくなるであろう。しかも、ああ、ひきこもりってこういう経験なんだというような、ようするにメガネですね。そういう新しいメガネをかけることができれば、見える世界の見え方も変わるわけですよ。まあ、そしたら、お付き合いの仕方も変わるかなみたいな。それである時から、私自身はこの腑に落ちるっていうようなことを目指すようになりました。

最初は、シンパシーから始まったって話をしましたよね。共感から始まったので、私はどこかで当事者のことが分かるっていうふうに思い込んでいたんですね、きっと。しかも年がすごい近かったんで、私が接している人たちっていうのは、生きてきた時代・状況とか、空気感みたいなもの、しかも調査地は首都圏で、私は神奈川出身ですから、そういうような土地の感じっていうか雰囲気っていうのを共有していたので“なんか分かっちゃう”というふうに思ってたんです。だから、親御さんよりも、年の離れた支援者よりも、私の方がたぶ

ん当事者のことがわかる。そこまで、ハッキリ言葉にして傲慢に思ってたわけじゃないですけども、どうもそのふしがある。だから共感っていうようなのが私の武器だったんですね。でも、それは共感っていうようなものを振りかざして、私も、同じですってみたいない感じでやると、「いや、あなた、ひきこもったことないでしょ、それなのになんで、そうぬけぬけと仲間面しているの」みたいにポーンツとやられるわけですね。20年前は怖かったですよ。最近では当事者の方々が逆にだめてくれるようになってますけど、20年前はほんと怖かったです。でも、今、思えばそりゃそうですよね。私もあなたと同じですなんて、いや、これはひどかったって思うところが正直あります。

で、あとのもう1つには、調査するっていうところでも、支援っていうところでも、共感しなきゃいけないっていう縛りが強い、プレッシャーがね。でも、共感っていうのは、自然と心がそう動くものであって、共感しようと思っできるものではない。人の心はそんなに簡単には動かないわけです。でも、私はその腑に落ちるっていうところまでいってようやく、そういうことだったら、それなら分かるわ！みたいな、自然とを感じるものも、なんか生まれたような気がするんです。それまでは、共感っていうようなものに振り回されてた感じがある。

じゃあ、どういうふうに腑に落ちたのかという話なんですけど、それは拙著に詳しく書いているんですが、どういうふうに腑に落ちたのかという話を2〜3分で説明をします。突然ですが、皆さん、今、呼吸していますか？してますよね。してるんですけど、今、息苦しいってなった人いませんか？呼吸してるっていうことを意識したとたん息苦しくなった人。私はなるんです。自分で言っというてなります。普段は呼吸をしてるなんて意識しないでやってるわけですね。呼吸のメカニズムがどうこうとかそんなこと考えないで、それでも呼吸できているわけです。でも「呼吸してますか？」って言ったら「どういうふうに呼吸ってできているんですか？」って言ったら、息苦しくなっちゃう。

実は、ひきこもるっていうのもそれに近いんじゃないかなって思って、ようは何かということ“生きる”っていうことについて、すごく真正面から考え過ぎてしまう。なぜ、そのように考えてしまうのかということ、ひきこもることは“悪だ”という、そういうような価値観、それでもって自分を追い詰める。そのあと自分は生きている価値なんかないっていうふうになる。じゃあ、生きていることにどのような意味があるんですかって、“生きる”っていうことと向き合わざるおえなくなっていく。そうすると意識しなければうまく回ったかもしれないものが、呼吸してますよね？っていう事だけで息苦しくなるというように、生きることがすごく大変になってしまふ。そういうものなんじゃないかというふうに考えると、そりゃ体も心ももたないなって思うんです。

“生きる”っていうようなことについて、あの、人はね、その、何も考えてないわけではないですけども、真剣に考え始めたら、生きてる意味なんてどこにあるの？って、誰もそれに対して正しい答えなんて出すことはできないし、正しい答えなんてないわけです。でも、それでも私達が生きていけるのは、ある程度、そういうような考え過ぎたらキリがないよってことを、パツパツパツっていうふうにして、スルーしていくことができるから、どうにかこうにか生きて行けているってところがあると思うんですけども。でもそれができなくなったとき、どうしても考えざるを得ない。それでその自分で生きるってことについて考えても、しょうがないやっというところまで行きつくのも1つの納得だと思ひ、自分が生きてるってことにこういう意味があるんだっていうふうに明確な何かを見つけるのも、ゴールってことになるかもしれません。生きている以上はゴールなんかないわけですけど、でも、そういうふうに考えてみると、働きたいとか関わりたいとか言っても、それでもどうしても体が動かないということに私はすごく納得がいったんですね。そういうふうになったところで、無理矢理共感するとか、そうではないところでお付き合いすることが、ちょっとできるようになったんですね。

時間が無いので締めにかききれないんですけど、でもやっぱり言いたいことがあって。私自身、実は、ひきこもるっていうまではいきませんでしたけれども、怖くて外出できないっていうか、電車に乗れなくなるってことがありました。それは人目が怖いとかそういうことではなくて、たとえば自分が乗ったこの電車が目的地の駅まで無事に着くっていうことが、

信じられなくなってしまった。底が抜けた感覚っていうやつですね。そういうふうになってしまったときにやっぱり、人と会うことができなくなっちゃったんですよね。そんなふうに底が抜けるっていうね、電車は乗ったら当たり前に目的地に着くって、これはみんな考えないで乗ることですよね。着かないかもしれない。事故が起こるかもしれないってそういう可能性なんかを見始めたら、怖くて電車なんか乗れなくなってしまうわけです。今だって南海地震が起きて、建物がつぶれちゃうかもしれない、そういう可能性だってないわけじゃないんですよね。でも私たちはたぶんそういう事はないだろうというふうな感じで、なんとなくここに座ってたり、話してたりってことができるわけですよね。

でも、もしかしたら、そういうこともあるかかもしれないっていう、そういう可能性っていうようなものに、私は目が行き過ぎてしまったことがあって、その時に「あ～ダメだ、人と関われない。人と会えない。ホント怖いわ」って言って、外に出られないってなっちゃったのが、すごい短期間だけどあったんですよね。それはなぜかと言うと、父親が突然死したからなんですけど、朝起きたら冷たくなってたんですよね。で、人はそんなに突然死ぬなんていうふうに、たぶん可能性は常にあるけれども、でも、そんな想像してたら日々の生活が大変になりすぎちゃいますから、やっぱり見ないんですよね。あんまり。そういう可能性に目を向け続けると、生活が回らなくなるので、見ないようにするという。だから、呼吸と同じような感じなんですけれども、そういうふうになった時に、ああこの人達が言っている動かないって言っているのはそこかと思ったんですよね。

自分が当たり前だと思っていることが、実は当たり前ではないのだって、そこは本当に、本当に当たり前のことに気付いてしまったこと、見過ぎてしまったことに私は動けなくなった。そういう経験があったので、そういうふうになった時に“あ～だったら分かる”って思いました。私はあの、自分自身がひきこもった経験があるとかないとか、就職活動の時に悩むとかかそういうようなところではなくて、“生きる”ってそもそもそういうことだよなって、そのような根本的な次元でこの人達とつながったような感じです。共感に振り回されるのではなく、自然と、「ああ、そういう意味で私とこの人達は同じなんだ」って思えるようになった。それがひきこもりに関わっている今の根本になっているところですね。

だから、今、私、共感も禁じていない。やっぱり、受容できないところもある。じゃあどういうふうにして共感とか受容っていうものとお付き合いをしていったらいいのかということで、「受け入れる」っていう言葉から「受け止める」という言葉に変えてみたらいいのだろうかと思うようになりました。受容というと、やっぱり、こう、受け入れる・飲み込むみたいなイメージ。でも、無理に分かろう、分かろうっていうふうにしなくてもいいんじゃないか。受け入れようってしなくてもいいんじゃないかなと思うんですよね。苦しくなったのは受容しなきゃいけない・飲み込まなきゃいけないっていう、相手に寄り添わなきゃいけないっていうプレッシャーがあまりにも強すぎたからだったのかな。だからいったん共感とか受容っていうものを手放して、改めてこの人達の話聞いてみようと思った。そしたら腑に落ちるところにたどり着けて、更には、自然と共感というようなものが生まれてきたわけですよね。だから、自然と共感っていうものが生まれないうちは、まあいいかなって、できないなって、共感できない・受容できないな、でも、あなたが何を言っているのかっていうのをすごく分かったっていう、そういう関心の持ち方っていう、お付き合いの仕方ってできないのかなって思うようになりました。

無理矢理、共感しよう、受容しようとしなくてもよいのではないかな、イライラしてしまうのであれば、まずはそのイライラをちゃんと認めてあげる。自分で自分を認めてあげる。そのうえで、何故、自分はこんなにイライラするのかなって、いうふうに自分と話をしてみる。変に分かったふりをしない、分かったつもりにならないで「すいません、分かりません。でも、あなたのことは分かりたいと思っています。で、私ができる・その分かるっていうギリギリのところまでは行きたいです」っていう、そういうふうにしてやり取りを続けていくしかないかなっていうふうに思うようになったし、人、それぞれのその腑に落ちるっていうところがあると思って、私は私なりに腑に落ちました。私は研究者で物を書いて発信することができる立場なので、こういう腑の落ち方はどうですかっていうふうに、自分自身の経験を交えながら皆さんに、

今日、ほんのちょっとだけ、こんなのはどうですかというふうに、お示したという感じです。

何にしても、自分が苦しくなってしまうたら、支援するっていうことは続けられないわけです。関わり続けるっていうことが、私はすごく支援で大事だと思っています。ただ、私は支援っていう立場に関わったことがないので、だから待たなしでの現場でやっている方からすると私の言っていることは綺麗事に聞こえるだろうなって怖いところもあるんですが、でも、支援しているつもりじゃないのに私がやっていることが支援になったんだなと思ったことがあります。それは何かというと、最近はどう全然行けなくなっていましたけど、ずっと東京の方で関わっていた集まりがあって、参加だけずっと続けてました。それで途中から共同世話人という形で関わるようになったんですけど、5年ぶりだったかな？ある当事者の方が、ほんと久しぶりに来たんですね。それでもって「あ～久しぶり、元気だった？」みたいな感じで挨拶をしたんです。そしたら、「あ～石川さんまだ、ここにいてくれたんだね。良かった」って言うてくれたんですね。別に、全然、支援するとかそんなつもりもなく、私自身が、ひきこもりって何だろうって考えたいから、ずーっとただそこに関わり続けてただけなのに、でもそこに居続けるっていうことが、支援になるっていうことがあるんだな～と思ったんですね。

っていうことは、関わり続けるためには、ちゃんと自分自身を辛くさせないで、追いつめ過ぎないで関わり続けられる自分がいるっていうこともすごく大事なんだなと思うと、イライラするんだったら、そのイライラだって認めてあげてもいいし、でもできる限り、イライラしない方がいいんだからっていうようなところで、共感とか受容っていうようなものをいったん手放してみてはいかがでしょうか？あるいはそれに振り回されていないかどうかっていうところは、ちょっと自分自身で確認してみるってことは必要なのかなっていうふうに、私自身は支援っていう立場では関わっていませんが、そのような経験もあってメニューⅠというお話をさせていただきました。

<信頼に根ざした支援を目指して>

残りの10分弱は「信頼に根差した支援を目指して」ということで、まとめをしたいと思います。私、支援というのは、実は、不信に根差しているのではないかというふうに思うところがあります。それはどういうことかという、ひきこもり状態にある人っていうのは、どんな年齢であっても子どもなんですよ。だから、親の会とかでね、参加されてる方の話を聞いていると、この人のお子さん、まだまだお若いんだろうな。それでもって心配なんだろうなって思っていたら、30・40歳なんですよ。子ども扱いできる年齢ではとっくにないんだけど、でも、ひきこもり状態にいる人は、そうやって子どもなんですよ。もちろん親にとってはいつまでたっても子どもなんですけど、社会的にもやっぱり子どもなんです。自分で働いて、お金を稼いで、税金おさめて生活を立てるっていうことができる。これが大人になることだという世間の常識からすると、ひきこもり状態にある人はいくつになっても子どものわけですね。で、子どもっていうのは保護すべき、無力で無能な存在だとされているわけです。保護者っていう言葉通りですよ。子どもっていうのは、保護する人間がいなければ生きていないということですよ。

さっき言った心配のあまり怒っちゃうっていう話ですけども、心配と不信ってすごい紙一重だなと思うところがあるんです。この人はどうなってしまうんだろう、大丈夫なんだろうかっていう心配っていうのと、心配だから何とかしてあげたいんだよ、この人はどうなっていくっちゃうんだろうっていうのは、実は、あなたは自分自身ではどうにもできませんよっていうメッセージと二重になっていませんか？あなたのことを助けたい・私心配なんです。っていうのは、言っている本人はほんとにそういう気持ちでいても、メタ的には、あなたは自分の力では何にもできません。だから私が保護して差し上げましょう。だから私が救って差し上げましょう、というメッセージにもなっている。

支援って、ただ単に支援するじゃなくて、どうしても支援してあげる・支援してもらおうというふうな、そういう関係に陥りがちですけどね、それってあなたが何もできないから私が助けをあげるよっていう、そういう相手に対する不信がどこかにありますよね。あなたは無力な存在です。無能な存在ですって見てるってことになりかねないんじゃないか。あるいは、そういうものに引っ張られざるをえないのではないかという感じがするんです。

だから、ひきこもっている人が被害者ではないっていうふうに言ったのは、被害者というのは無力でかわいそうな人っていうようなイメージがあるから、そこからはやっぱり抜け出さなきゃいけない。ご本人はご本人で、ちゃんと自分自身の生活を何とかしようとサバイバルしている。サバイバルしている人なんだっていうふうに見るためには、そういう力がある人なんだ。そういう事ができる人なんだって、それは信頼っていう事ですけれども、被害者的な見方をしてしまうと、どうしても不信の方に引っ張られてしまうような気がするんです。でも、ほんとにひきこもっている人って、そんなに無力で無能なんですか？ いやそうじゃないですけどね、というふうに思うわけです。ひきこもっているっていうようなことは、何もしていないっていうふうに見られるっていうか、思われがちだと思うんですね。皆さんも中には、そういうふうにいる人もおられるんじゃないかと思うんですけども。

ひきこもりの集まりでおしゃべりしていると、こういうことを言う人がいる。バイトもしていないし、何にもやっていない。毎日ボーっとしているだけで、しょうもないこと悩んで、月1くらいで自助グループに顔出して、あとは筋トレやってそのくらい。それで何にもやってないってこの人言うんですよね。でも、色々やってますよね。まず、悩んでますよね。自助グループに顔出てますよね。筋トレしてますよね。やってるんですよ。でも、バイトもしていないし、何にもしていないって言っちゃうんですよね。ひきこもってる間に何してましたか？ 何してますか？ っていうと何にもやってませんっていうけど、何にもやってないなんてこと、ありえないですよ。でも、なんでそれが、その何にもやっていないってふうに見えてしまうのかっていうところで、すけれども、反対に何をすれば、何かやってるって認められるのかっていう話ですよ。お分かりですよ。働いてるとかそういうことですよね。学校に行ってるとか、いわゆる、社会生活なるものをきちっと営んでるっていう、そのところがなければ、何かやってるとは認められない。

でも、いろんな事やってるんです。悩んでるんです。筋トレやってるんです。でも、それは周囲の人間には分からないし、本人も何かやってるっていうように自分のことを見るのはすごい難しいみたいなんですよ、そりゃそうですよね。ひきこもっているのは悪だ、人間働くのは当たり前だ。とか、働かない自分はクズだっていうふうな、そういうふうなところにいたら、何にもやってないっていうふうに思っちゃいますよね。自分でも。

でも、ひきこもりの当事者の人達と話していて、すごいなっていうふうに見えることもやっぱりあって。よくそこまで色々なこと、ほんとに生きるっていうことについてもそうだし、この世の中っていうもの、社会の在り方っていうものに対して考え抜けるな、と。深い洞察っていうんでしょうか。そこまでの言葉を持っている。皆が皆、頭が良かったとかそういうことじゃないんですよ。たぶんそこまで、言葉を耕さないと、自分自身の生きるっていうことを支えられないから、だから一生懸命考えて考える。で、そのフリースペースとかそういうふうな所へ行ってもみんな凄い、ものすごい配慮っていうようなものができる。配慮し合う。

だから本当にこなれてくると、自分達がむしろ支援者に支援してやっているみたいな、そういうことを言う場面も出てくるわけですね。変なことを言ったりすると、そういうことは当事者にとって傷つく言葉だから、そういうことは言っちゃダメだよというように、それとなく支援者に教えてあげるみたいな。そういう配慮ができる。配慮が出来過ぎるから、辛いっていうのがくっついてるんですけどね。だからと言って、ひきこもりの当事者が聖人君子だとも思わない。ダメなこともある。でも、やっぱりできることがちゃんとある。尊敬すべきところも、すごくたくさんある。それでも個人的に合う合わないとかはあるし、尊敬できる人の中でも、やっぱりダメだよなって思うところもある。フラットに見ればダメだなと思うところもあれば、いいところもある。ただの人間です。たしかにいわゆる社会経験っていうようなものが浅かった

り、無かったりするかもしれない。だけれども、そこにおさまらないものが、ものすごく蓄積されているんじゃないか。社会経験っていうものばかりで見ていったら、ずっと子どもなんです。でもそうじゃなくて、ちゃんと蓄積もされているんです。

信頼に根差して支援っていうものをやっていきたいなと思うんですけども、支援の大原則としてよく言われるのは、本人の頭を飛び越えて、周りが何かをするのを慎むこと。ひきこもりの支援は本人がそれを求める時に初めて開始されるんだっていうようなことが厚労省のガイドラインにも書かれていますけど、その話はちょっと置いておいて、とにかく本人の頭を飛び越えて周りが何かするってことをしないようにする。そして、何が必要なのか？何をを目指すのか？何が幸せなのか？っていうこと、それも周りが決めることではない。本人が決めるものであるし、本人がちゃんとそれを決めることができるんです。

ひきこもっていても何も蓄積されていないわけではありません。何にもわからない子どもっていうわけでもありません。ひきこもっている人は無能・無力な存在ではないんです。自分で自分なりに何とか生きていけるようにサバイバルをしてるんです。自分の価値観と組み合わせをして、言葉を耕して、自分はどうやって生きていきたいのかっていうことをちゃんと探しているんです。そういうふうに相手を見てみる。

だから、まずは「できない」じゃなくて「できるかもしれない」って信じてみる。信頼するって賭けるってことと似ている気がします。「できるかもしれない」っていう可能性に賭けてみる。できないかもしれないですよ？でも、最初から「できない」と決めつけて「だから私が助けてあげなきゃいけない」って関わるのと、「できるかもしれない」って賭けてみるのとでは、できていく関係性が全然違うと思うし、できない、できないっていうふうに見てたら相手だって嫌だろうし、自分だってなんだかもどかしいな、イライラするなっていう気持ちから、やっぱり自由になれないですね。それは苦しい。だからお互いが支援っていうところで、うまいことお付き合いしていくためには、まずは相手に賭けてみるっていうことが必要なんじゃないか。

ひきこもっているっていうただそれだけで、人を殺めてしまうようなところまで追いつめられてしまうこの世の中になってしまっている。そんな世の中を変えていくためにも、ひきこもりは悪なんだっていうまなざしの根っこにある価値観や、ひきこもっている人たちへのいろんな感情をちょっとずつでも見直していく必要があるんじゃないか。私自身、まだまだ未熟でたんこぶを作りながらですけど、これからもひきこもりとお付き合いさせていただきたいと思っております。

【資料】

生きづらい若者たちのホンネ

石川良子（松山大学）
iskwryk@gmail.com

はじめに

I ひきこもるという経験をどう理解するか

- (1) 「ひきこもり」のイメージと実際
- (2) 出て行ける／出て行けない
 - ・ どのような人なら会えるのか？ どのようなところなら出かけられるのか？
- (3) (4) インタビューから考える
 - ・ ある人は、母親は OK、父親は NG だった
 - ・ 精神的苦痛が助長される状況を回避
 - ・ 引け目を感じるからこそ出て行けない
 - ・ “ひきこもっている”ではなく“ひきこもらされている”
- (5) ひきこもらせる社会
 - ・ ひきこもることを「悪」とみなす価値観が支配的な社会
 - ・ トライ&エラーが許されない社会
- (6) 「ひきこもり」をどう支援するか
 - × ひきこもっている人＝被害者
 - × ひきこもっている本人の矯正
 - ひきこもらせる社会の矯正→私たち1人ひとりに何ができるか

Ⅱ－1 ひきこもる人の存在をどう受け止めるか

- (1) へんに物分かり良くならない
 - ・ 「ひきこもり」に対するネガティブな印象・感情→どういう感じ？ なんで？ どこから？
 - ・ 目指してみたい「分かる」→実感も共感もない。理屈や道筋は納得がいく。
- (2) 「受け入れる」から「受け止める」へ
 - ・ 無理に分かろうとしなくてもいいのでは？
 - ・ 「受け入れる」≡「飲み込む」→「受け止める」≡「腑に落ちる」
- (3) 「違い」を認識する
 - ・ たとえば、生きてきた時代的・社会的状況が違う

Ⅱ－２． 支援の報告

Ⅱ－２ 「居場所」とは？「居場所」をどう作るか？

- (1) 地域資源の開発と発掘
 - ・「居場所」になりえるところ→支援を行っているところだけに限らない
 - ・街を歩いているなかで……
- (2) 「居場所」にとって欠かせないもの
 - ・3原則；安全・安心・風通しのよさ
 - ・ステップアップのイメージから距離を取ること
- (3) 「居場所」の難しさ
 - ・引きこもっている最中の人、出てきてから間もない人にとっては…痛みの共有
 - ・活動の場を広げつつある人、職場を持った人にとっては…骨休め
⇒「安全・安心」と「風通しの良さ」をどう両立するのか？
- (4) 「人」ではなく「場」を支援する
 - ・「スタッフ＝助けてあげる人／利用者＝助けてもらっている人」という構図をやめてみる
 - ・スタッフも利用者もともに「場」を作り上げていくメンバーとして位置づける
 - ・言いだしっぺにあたる人は、どういう「場」を作っていきたいのかをきちんと設計する
 - ・設計図からはみ出る行為や言動があれば注意を促す→「場」の品質保証
 - ・みんなで「場」を守っていく

Ⅲ 信頼に根ざした支援を目指して

- (1) 支援は不信に根ざしている？
 - ・ひきこもり状態にある人→「子ども」
 - ・「子ども」→保護すべき無力・無能な存在
 - ・「何とかしてあげたい」⇔「あなたは自分ではどうにもできない」
- (2) ひきこもっている＝何もしていない？
 - ・何をしていれば「何かやっている」と認められるのか？
 - ・いわゆる社会経験には収まらない経験は蓄積されている！
- (3) 信頼に根ざした支援を目指して
 - ・支援の大原則
 - － 本人の頭を飛び越えて、周りが何かすることを慎む
 - － 何が必要なのか、何をを目指すのか、何が幸せなのかは、周りが決めることではない
 - ・ひきこもっている人は、無能・無力な存在ではない！

(5) 田辺市ひきこもり検討委員会(令和元年度)議題

(出席者はひきこもり検討委員の人数)

第 1 回(R1. 5. 11) 出席者 25 名	第 2 回(R1. 10. 26) 出席者 19 名
-----------------------------	------------------------------

・ 委員自己紹介 ・ 田辺市のひきこもり支援について 平成 30 年度事業報告 令和元年度事業計画 ・ その他 関係機関の紹介および意見交換	・ 令和元年度上半期事業報告 ・ 令和元年度下半期事業計画 ・ 講義 『南紀高校の教育相談活動』 南紀高等学校 談儀 善弘 氏 ・ 意見交換
--	---



小委員会(令和元年度)議題(出席者はひきこもり検討小委員の人数)

第 1 回(R 1. 6. 20) 出席者 10 名	第 5 回(R 1. 11. 21) 出席者 8 名
・ 小委員会の計画について ・ ひきこもり支援啓発講演会について ・ 8050 問題を考える	・ ひきこもり支援啓発講演会について ・ ひきこもり相談窓口の愛称募集について
第 2 回(R 1. 7. 18) 出席者 7 名	第 6 回(R 1. 12. 19) 出席者 8 名
・ 大委員会の内容について ・ 8050 問題を考える	・ ひきこもり相談窓口の愛称募集について ・ 支援の報告
第 3 回(R 1. 8. 22) 出席者 10 名	第 7 回(R 2. 1. 16) 出席者 10 名
・ 大委員会の内容について ・ ひきこもり支援啓発講演会について ・ 8050 問題を考える	・ 支援の報告 ・ 令和2年度 ひきこもり支援啓発講演会について ・ 愛称募集について
第 4 回(R 1. 9. 19) 出席者 8 名	第 8 回(R 2. 2. 20) 出席者 8 名
・ 大委員会の内容について ・ ひきこもり支援啓発講演会について ・ 高校訪問について	・ 令和2年度 ひきこもり支援啓発講演会について ・ 支援の報告 ・ 令和元年度 まとめ冊子について
	第 9 回(R 2. 3. 19) 出席者 8 名
	・ 令和2年度 ひきこもり支援啓発講演会について ・ 令和2年度 事業計画について ・ 支援の報告

(6) ひきこもり検討委員会 講義

『南紀高校の教育相談活動』

講 師： 県立南紀高等学校 教諭 談儀 義弘 氏
日 時： 令和元年 10 月 26 日
参加者： 27 人(事務局含む)



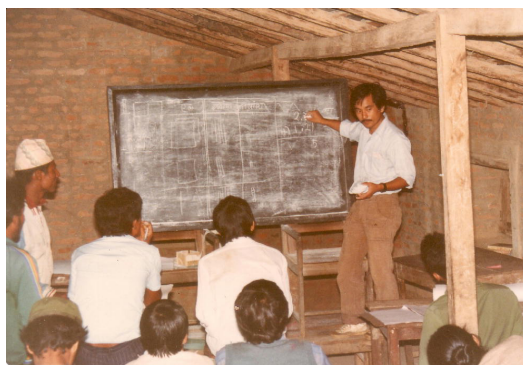
0. はじめに

みなさん、こんにちは、談儀と申します。よろしくお願い致します。

南紀高校のことについてお話を、ということなのですが、私は通信制課程の教師なので、かつて定時制の学校にも勤めたことがあるとはいえ、南紀高校全体の様子となると分かっていないことも多いでしょうから、そのつもりで聞いていただけたらと思います。

南紀高校の話をする前に、まず私自身のことを少し話しておきます。

私はそもそも大学を出るまで和歌山市で生まれ育ったのですが、大学を卒業してから、ふとしたはずみで青年海外協力隊に参加して、ネパールという国で現地の子供たちに数学を教えることになりました。何故このような話をするかと言いますと、電気も水道もない暮らし、当然テレビはないし、娯楽と言えるようなものが何もない所で暮らしていると、人間そのものに関心を持つようになるのです。そして、生活のスタイルや宗教、文化や習慣などが違っていても、人間として生きていく様は、どの国の人も同じなのだなと思うようになりました。



青年海外協力隊での活動(ネパールの学校にて／1986年)

ところが日本に帰ってくると、とても大きなカルチャーショックを感じたのです。ネパールに行ったときよりも帰ってきた時のショックの方が大きくて戸惑いました。私の場合、帰国後に講師として定時制の高校に勤めることになったのですが、生徒たちがどういう背景を持って、どのような思いで学校に来ているのか、など全く意識せずに、単に“自分と同じ日本人の生徒たち”という目線でしか見ていませんでした。そして目の前にいる高校生が自分と違うこと、またその違いを理解することの重要性に気づいたとき「これが異文化理解なのだ。」と思った訳です。考えてみれば当たり前のことなのですが、先日行われた講演会で石川先生がされた、「分かっているつもりで話していたら実は分かってなくて、自分は分かってないのだからというふうにいったん戻して、改めて当事者と向き合うようにした。」という主旨のお話に通じるものと思います。

そういう体験から「異文化理解と多文化共生」というのが私のテーマになっていました。南紀高校に来てもう8年になります。通信制という学校は全日制とか定時制とは違う、もう全くの異文化と言っているようなところですよ。さらに教育相談というのは、私自信が経験したことのない環境や体験を経てきている生徒たちをいかに理解し、当事者の困り感をどう減らしていくかという活動であり、それはあのネパールでの体験に通じる「異文化理解と多文化共生」の実践の場であると思っています。

1. 本校の概要と現状

まず、高校を取り巻く最近の動きについて触れておきます。

2005 年(平成 17 年)に県教委から高等学校の再編計画が出されました。少子化による生徒減への具体策、つまり将来的にどういふふうな統廃合・再編をしていくかが示され、県立の中高一貫校を桐蔭高校や田辺高校などに創っていくという話が出てきたのもこの時期です。その後 2010 年に再編整備計画が出されて、その中で、特に定時制・通信制の学校については、県内に 3 カ所の拠点を作るということが明記されました。具体的に言うと日高郡から新宮・東牟婁郡にかけては南紀高校が、橋本市の伊都高校と紀の川高校が合併されて伊都中央高校、和歌山市の青陵高校・陵雲高校が合併されて、きのくに青雲高校が定時制通信制の拠点校とされました。

本校の沿革

- ◇ 1948 年(昭和 23 年) 田辺高等学校定時制設置
- ◇ 1963 年(昭和 38 年) 南紀高等学校定時制開校
- ◇ 1964 年(昭和 39 年) 県立和歌山通信制高等学校が設立。田辺スクーリング・紀南スクーリングが開設
- ◇ 1968 年(昭和 43 年) 県立陵雲高等学校が設立。田辺学級・新宮学級が開設
- ◇ 1988 年(昭和 63 年) 衛生看護科(全日制)設置
- ◇ 2002 年(平成 14 年) 衛生看護科が看護科(5年課程)に移行
- ◇ 2009 年(平成 21 年) 昼間定時制設置
- ◇ 2011 年(平成 23 年) 通信制課程設置。新宮学級を南紀高校が引き継ぐ。同時に陵雲高校の田辺・新宮学級の募集停止。
- ◇ 2014 年(平成 26 年) 3 月末、陵雲高校の田辺・新宮学級の閉級。
- ◇ 2016 年(平成 28 年) 3 月末、周参見分校(夜間定時制)の閉校。

本校の規模は次の通りです。

- ☆ 生徒数は昼間部 86 名、夜間部 25 名、通信制が 330 名(田辺本校 271 名、新宮学級 59 名)
- ☆ 職員は校長 1 名、教頭 2 名(定時制 1、通信制 1・・・ただし、互いに兼務)
- ☆ 教諭・講師は昼間部 10 名、夜間部 9 名、通信制 8 名
- ☆ 養護教諭は夜間部 1 名、昼間部には午前中のみ、通信制には日曜のみの非常勤講師。

ただ養護の教員は、非常勤の職員では限界があるので、結局、夜間部の養護教諭がかなりの業務をカバーしてくれています。また事務職員も校務員を含めて 6 名ほどいますが、勤務する曜日や勤務の時間帯、業務の内容もかなり違う中でなかなか大変な思いをされていると思います。

定時制のことについてお話しします。定時制は昼間部も夜間部も普通科・単位制の学校です。1 年生・2 年生などという“学年”を使っているのは便宜上のことで、基本的には 74 単位取得したら卒業できるというシステムです。資料に「多様な形態」と書いてあるのは、色々な形で単位を取る方法があり、原則 4 年かかるところを 3 年間で卒業することもできるということです。たとえば「チャレンジ講座」というものが通常の授業以外に開設されていますし、「夏季集中講座」や通信制課程の講座を学びに来る「定通併修」という制度もあります。

〔定時制〕

- ◆ 単位制 …………… 74 単位以上取得で卒業。通常 4 年間の在籍（3 年間の卒業可能）
- ◆ 前期・後期制 …………… 前期卒業可能
- ◆ 多様な形態の講座 …… 基礎を大切にする講座。英語検定・漢字検定等を単位認定。和歌山大学の公開講座を単位認定
- ◆ チャレンジ講座 …………… 3 年間で卒業する（三修制）生徒対象の講座
- ◆ 夏期集中講座 …………… 夏期休業中に実施する 5 日間の講座
- ◆ 定通併修制度 …………… 本校通信制の講座を学習することで単位認定

通信制については、学校説明会などではよく「自学自習が基本」であり、「レポート・スクーリング・テストが3本柱です」と言っています。ただ全く登校しなくていいのではなくて、必ず何時間かは学校でスクーリングを受けなければならないですし、テストも学校で受ける必要があります。生徒や保護者の中にこのことを誤解されている方がおられるような気がします。また本校の通信制も単位制です。入学時に取得している単位数に応じて一応“学年”に振り分けていますが、本校の定時制と同じく 74 単位が取得できた年度に卒業することになります。他の高校から転校または一旦退学した生徒の通信制への入学の機会が 4 月だけでなく、8 月にもあるのは通信制だけです。

〔通信制〕

通信制の三本柱

レポート（報告課題）、スクーリング（面接指導）、テスト

- ◆ 自学自習が基本 …… ただし、全く登校しなくていいのではない。
- ◆ スクーリング …… 日曜日に実施（年間約 30 日）、平日（年間約 40 日）も実施
- ◆ 単位制 …………… 74 単位以上取得で卒業。（年間に最大 30 単位受講登録可能）
- ◆ 入学の時期 …… 転入学、編入学については 4 月と 8 月、新入学

定時制も通信制も結構、生徒の年齢層の幅が広いです。定時制には 50 代の方が複数おられるようです。通信制は、かつては 86 歳の方がいましたし 60 代の方も何人かおられましたが、今は 40 代が最高です。最近はこの年齢の幅が狭くなっていて 20 代の方が多いです。

通信制で特徴的なのは、全国平均のデータでは 15 から 16 歳の生徒の割合が高いのに本校ではすごく少ないことです。10 代という年齢の幅で考えると全国平均では 8 割くらいの生徒が在籍しているのに対して、本校では 5 割くらいとなっています。このことは中学校を卒業して、どこかの高校には行くけれど、その後転入学・編入学という形で、本校に入学してくる生徒が多いということなのでしょう。

年齢別生徒数〔通信制〕

2019年（令和元年）8月1日現在

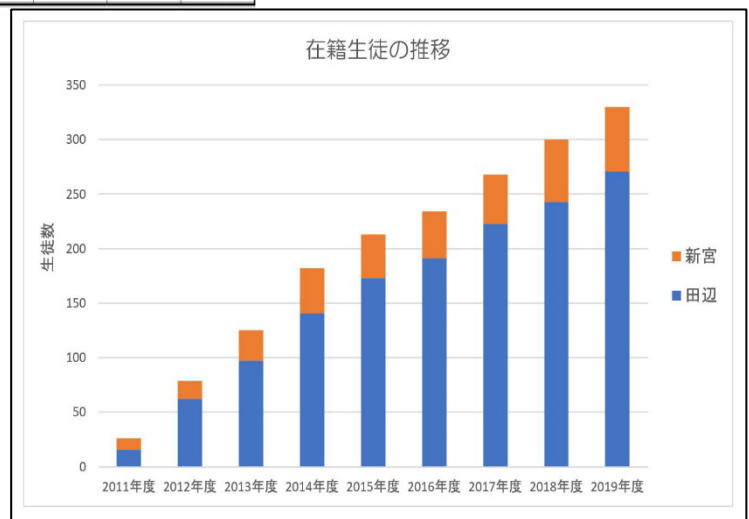
年齢	男	女	計	割合（％）		全国（H30） 【学校基本調査】	
15	6	7	13	3.9	50.6	17.3	83.5
16	10	17	27	8.2		24.2	
17	24	20	44	13.3		28.7	
18	25	23	48	14.5		8.9	
19	27	8	35	10.6		4.5	
20歳代	79	71	150	45.5			12.6
30歳代	7	4	11	3.3			2.6
40歳代	1	1	2	0.6			0.7
50歳代	0	0	0	0.0			0.3
60歳以上	0	0	0	0.0			0.2
小計	179	151	330				

在籍生徒数の推移〔通信制〕

	2011年度 （平成23年）	2012年度 （平成24年）	2013年度 （平成25年）	2014年度 （平成26年）	2015年度 （平成27年）	2016年度 （平成28年）	2017年度 （平成29年）	2018年度 （平成30年）	2019年度 （平成31年）
田辺	16	62	97	141	173	191	223	243	271
新宮	10	17	28	41	40	43	45	57	59
計	26	79	125	182	213	234	268	300	330

それから、通信制の在籍生徒数の変化を示すグラフを見て下さい。わりと直線的に増えていることが分かると思います。これだけ生徒数が減っているご時世に在籍数が増えているのが現在の状況です。もっとも通信制高校に在籍する生徒数が増えているの

は全国でも同じ傾向にあるようです。今年度本校の通信制は 300 人超えましたが、もう少し増えるかもしれません。350 人くらい、もう少し増えるでしょうか。



2. 教育相談活動について

（1）不登校生徒の現状

私たちが使いたい「不登校」という言葉の定義が曖昧ですし、登校する気持ちがあるのかないのかなど、他人が判断することはできません。また、そもそも通信制高校は“出席日数”を数えないので、すなわち“欠席日数”も数えません。ですから、学習の意思はあるが、心身の状態や生徒を取り巻く環境に課題があって登校が困難になっている生徒を“主観的”に捉えたものとして次の数字を見ていただきたいと思います。

定時制の方で、昼間部は 86 名中 42 名、夜間部は 25 名中 15 名なので、少し夜間の生徒の方がその割合が高いようですが、40～50%、あるいは半数より少し多い数の生徒が不

登校を経験しています。ところが今も不登校が続いているかというところ、案外 6 名とか 5 名とかになっていますので、割合にすると 7% くらいです。夜間部の場合、全生徒数が 25 名なので、1 名変わると何%も変わってしまうので、昼間部に比べて 20% という数字が大きいのか小さいのかは分かりませんが、だいたい毎年こんな感じのようです。

2019年(平成31年)度	昼間定時制	夜間定時制
4月当初生徒数 計	86名	25名
不登校経験者	42名(48.8%)	15名(60.0%)
現在、不登校状態 〔内、休学・退学〕	6名(7.0%)	5名(20.0%) 〔1; 2 名〕
備 考	休学2名、退学1名	日本語が未熟で学業不振 1名

通

信

制はやはり新入生の不登校経験の割合が高いです。しかし新入学と転編入とに分けて集計しましたので、合計のところを見ると不登校経験者は 6 割くらい、定時制と似たような感じでしょうか。そして、今でも引きこもっている生徒が 1 割、不登校で未就労、つまり買い物程度の外出はするが、それ以外はほとんど家にいるみたいな感じの生徒も約 1 割です。ただ何とか週 1 回のスクーリングだったら行ける、と学校のためにだけ外出するというタイプの生徒も何人かはいます。

さらに現在も心療内科等の医療機関に通っている生徒が 27% ですから、3 分の 1 近くはまだ、通院して投薬などの治療を受けているという実態があります。

新入学生と転編入学生の様子〔通信制〕

<R1年 9月現在>

	新入学	転・編入学	合計
生徒数	55	275	330
不登校経験	46 83.6%	169 61.5%	215 65.2%
引きこもり状態	15 27.3%	19 6.9%	34 10.3%
不登校・未就労	4 7.3%	26 9.5%	30 9.1%
登校はできる	2 3.6%	11 4.0%	13 3.9%
心療内科等への通院	26 47.3%	65 23.6%	91 27.6%

(2) 教育相談のあり方

本校では、次のような手順と方法で教育相談を進めています。

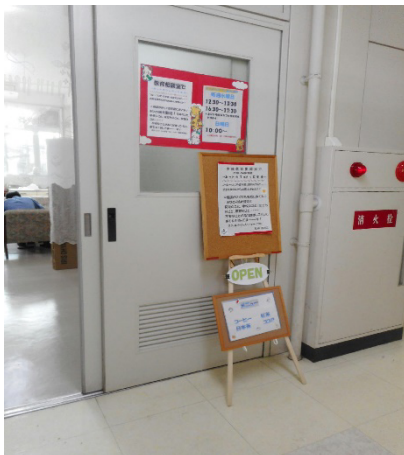
- ☆ 出身中学校や前籍校からの出願書類 等の整理
- ☆ 担任に生徒の状況調査 … 不定期(年に3～4回程度)
- ☆ 情報共有 … いろいろな機会を捉えて生徒のこと、関係することなどを話題にして状況把握と共有を図る。
- ☆ SC、SSW への相談 … 課題の大きい生徒には直接教員から、または特別支援教育コーディネーター(Co)を通してスクールカウンセラー(SC)やスクールソーシャルワーカー(SSW)に相談し助言を得る。

※ SC ; 30 日(150 時間)／年 … 定時制・通信制に 1 人ずつ配置
SSW ; 60 日(360 時間)／年 … 通信制・定時制合わせて 1 人配置

☆ 特別支援教育委員会 … 月に一度の定例会を開催
委員は管理職(教頭)、Co および Co 補
佐、養護教諭、SC、SSW

(3) 生徒の居場所づくり

休憩時間や放課後に、どこかホッとできる場所を作る必要があるのではないかという提案がスクールソーシャルワーカーさんからありました。昼食や雑談などゆっくりできる空間として、このただテーブルと椅子だけ置いている部屋に、移動式のホワイトボードで仕切りをしただけですが、周囲の視線を避けられる空間を作りました。



もう一つ提案がありました。休憩時間や放課後に小さな部屋を開放することです。お茶とかお菓子とか出して、とにかく生徒に来てもらいやすくする、というのが一番の目的で、“ホットカフェ”と名付けました。雑談する中から実際の悩みなどが出てきたら、相談に移っていく、あるいは担任なり、しかるべきところに繋いでいく、という場です。入り口に立てる看板にアニメの絵を描いたり、部屋の中を飾り付けたりするのに生徒を巻き込んでいくようにもしてくれています。

(4) 保護者懇談会

子育てや学校での様子が分からなくて悩んでいる保護者の方々に集まってもらい、自ら話を出し合う中で、助言や共感を得る場として開いています。今年度は、定時制と合同で年に3回、加えて通信制独自に3回程度予定しています。管理職(校長・教頭)、職員、SC、SSWだけでなく、田辺保健所からも精神福祉士の方に来てもらっています。

3. 外部関係機関との連携

この「ひきこもり検討委員会」がそうですし、市町の適応指導教室、保健福祉を担当する課や児童相談所、NPO・法人等と連携を行うことがかなり重要であることは随分前から感じていました。特に本校は南紀若者サポートステーションを運営する“NPO 法人ハートツリー”と「若年者支援の業務提携に関する覚書」を交わし、強い連携をさせてもらっています。

(提携業務の範囲)

- ・両者の実施する行事の企画、行事参加
- ・両者の実施する、生徒・利用者及び各々の保護者への相談活動
- ・両者の業務上必要な家庭連絡・訪問
- ・両者の行う啓発、広報活動

定時制においては週に一度(火曜日の昼休みの時間帯)、通信制には月に一度(日曜スクーリングのある日の昼休み)、生徒ホールや教室を利用して相談活動をしていただいています。

4. 本校の教育相談に関わる課題

現在直面している課題や気になることをあげておきます。

☆ 生徒の持つ課題の多様化、複雑化、深刻化

- 不登校経験者だけでなく、支援学級に在籍していた生徒が増えている。
- 四年制大学進学希望生徒、就職希望生徒への対応の一方で、不登校、引きこもりの生徒への対応も必要。
- 年齢差が大きく、また居住地の範囲が広い(通信制:由良町から新宮市に在住)。

☆ 教職員の不足と多忙化

通信制生徒数が300名を超えている中で、教頭を除く教員が8名。定時制は生徒数が少なく教員数も少ないが、大規模な学校と同じ数の業務がある。

☆ SCやSSWの活用が不十分

定時制生徒の相談件数が増加。教員と打合せする時間の調整・確保がむずかしい。

☆ 記録の方法や、活用の仕方、個人情報の扱い等についての研究が必要。

☆「合理的配慮」をどう考えるか。

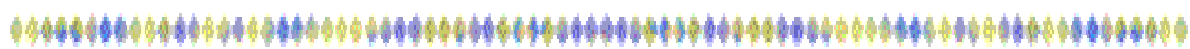
☆ 夜間定時制の生徒減、通信制の生徒の増加

5. おわりに

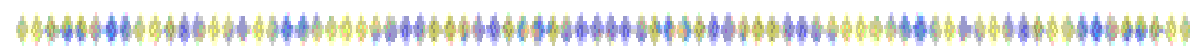
最後に、毎年文化祭で創っているビックアートの写真を見てください。もう6年くらい続いています。これは去年のものなのですが、折り紙を1cm角に切ったものを6万チップくらい貼り合わせています。これは田辺本校と新宮学級の生徒だけではなく、かなり多くの方の協力も得ています。先生方、特に非常勤講師の先生方も協力してくれていますし、生徒が家に持って帰って、お母さんと一緒にやってくれているという話も聞きます。「どっちかというとお母さんの方が一生懸命になって…」などと聞くと、すごくいいなと思います。生徒だけの作品じゃなくて、これは通信制に関わりのある人達の想いの詰まったもの、みんなで取り組んでいるというひとつの象徴だと思うからです。

これで私の報告を終わります。ありがとうございました。





Ⅲ. 参考資料



家から こども が
でられない
家族 でかかえこまないで
ほっこり しませんか

ほっこり会
(ひきこもり家族の会)





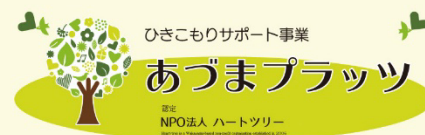
ハートツリーは
生きづらさを抱える人たちの未来への一歩を応援しています。

生きづらさや課題を抱える人の相談や、安心して過ごせる『居場所』づくりから、
就労支援まで、社会へと飛び立っていくための緩やかな歩みを私たちは全力でサポートします。

ひきこもりサポート事業



「外へ一歩踏み出したい」「誰かと話をしたい」
● そんなときに気軽に立ち寄れる
『居場所』がここにあります。
相談・訪問支援・社会体験活動・
レクリエーションなどを行っています。



【ご利用日時】月～金曜 /9:00～18:00
(居場所は13:00～17:00まで)
(土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)
〒646-0028 和歌山県田辺市高雄一丁目3番27号
【TEL・FAX】0739-33-7850
【E-mail】info@heart-tree.org



【ご利用日時】月～金曜 /9:00～18:00
(居場所は13:00～17:00まで)
(土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)
〒647-0073 新宮市木ノ川169-3
【TEL・FAX】0735-31-7740
【E-mail】platz@heart-tree.org



就職支援プログラム

「就労」に向けたそれぞれのステップアップを応援します。



南紀若者サポートステーション

(和歌山県・厚生労働省受託事業・和歌山県若者サポートステーション withyou 事業)



写真はイメージです

15 歳から 39 歳までの若者への就労支援
 「働きたいけど働く自信がない若者への支援」
 「働いていない期間が長いので就職できるか心配」
 「どんな仕事が自分に合っているのかわからない」
 「対人関係が苦手で就職活動が辛い」など
 職業的な自立のためのご相談を受け付けています。
 相談の他にも、就職に役立つセミナーなどを開催しております。



【ご利用日時】月～金曜 /10:00～18:00 (土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)
 〒646-0028 田辺市高雄一丁目 23 番 1 号 田辺市民総合センター北館
 【TEL】0739-25-2111 【FAX】0739-25-0085
 【E-mail】nanki-saposute@ec2.technowave.ne.jp 【HP】http://www.nanki-saposute.jp



串本サテライト
 【ご利用日時】水・木・金 /13:00～16:00
 (土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)
 〒649-4125 東牟婁郡串本町姫 27
 (旧) 養春小学校 2 階 5・6 年生教室
 【TEL】0735-67-7172 【FAX】0735-67-7173



新宮サテライト
 【ご利用日時】水・金曜 /11:00～16:00
 (土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)
 〒647-0073 新宮市木ノ川 169-3
 【TEL・FAX】0735-31-7740
 【E-mail】plat@heart-tree.org



就労準備支援事業 「働く」ことの自信へと繋げる訓練の「場」

ルルコロ菓子工房

〒646-0028 田辺市高雄一丁目 23 番 1 号 田辺市民総合センター北館
 【定休日】土曜・日曜日 【TEL・FAX】0739-22-9902

からだに優しいお菓子とカフェ

 cafe rurucoro

〒646-0042 田辺市南新町 173 (銀座商店街)
 【営業時間】火～日曜 /11:00～17:30
 【定休日】月曜日 (祝日の場合は翌火曜日) 【TEL】0739-24-0066

OnlyOneProduct **tete テテ**
 手作り雑貨

〒646-0028 和歌山県田辺市高雄一丁目 3 番 27 号
 【TEL・FAX】0739-33-7850





学習支援事業



ひとり親家庭の子どもや不登校生の学力向上と、様々な課題に寄り添います



田辺市子どもの学習支援事業

「ひなた塾」

■小学生(4年生～)、中学生、高校生(定時制・通信制)

【時 間】学年によって時間が異なります

【受講料】無料



子ども食堂

「ひなた食堂」

■月1回 第4火曜日

■ひなた塾受講生

【時 間】18:00～

【料 金】1回100円



認定

NPO法人 ハートツリー



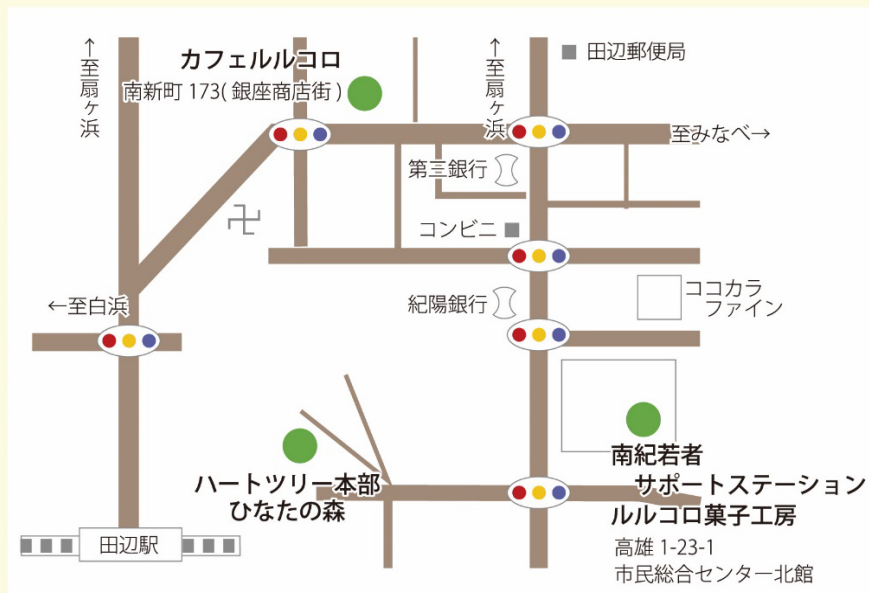
お問い合わせ

〒646-0028 和歌山県田辺市高雄1丁目3番27号

〈tel・fax〉0739-33-7850

〈e-mail〉info@heart-tree.org

〈HP〉<http://heart-tree.org/index.html>



NPO法人かたつむりの会

設立趣旨

「まちづくり」や「環境保護」の問題を障害を持った人や社会に出ることに支援が必要な人たちの就労、生活、発達支援につなげて取り組んでいきたいと考え、この法人の設立に至りました。

問題を個々に捉えるのではなく関連した問題、課題として捉え、活動していくことで、関わった全ての人や地域社会が安全で豊かなものになっていくことを願います。

まったく微力ではありますが、出来る所から少しずつ取り組んでいければと思っています。

沿革

2007年度

任意団体かたつむりの会として、社会生活を送る上で支援を求める人たちと共に活動を開始。

2008年2月29日

NPO法人かたつむりの会、設立

2009年2月

「町家カフェ上屋敷二丁目」をオープン。

2009年8月

障害者就労継続支援A型事業所として、県の指定を受ける。

2011年4月

町家カフェ多機能型として、障害者就労移行支援事業所「ワークサポート・いこう」を銀座通りに開所。一般就労に向けて、二年間の支援プログラムを実施する。

2012年9月

町家カフェ2号店として、元中部公民館を改修し「ララ・ロカレ」オープン。

2013年4月

「ワークサポート・いこう」を障害者就労継続支援B型事業所に変更。

2014年8月

指定特定相談支援事業所「町家カフェ上屋敷二丁目」を開所。

2016年11月

法人本部・指定特定相談支援事業所・就労継続支援B型事業所「ワークサポート・いこう」を移転。

2019年4月

「町家カフェ上屋敷二丁目」を障害者就労継続支援B型事業所に変更。

町家カフェ上屋敷二丁目 (障害者就労継続支援B型事業所)



古民家を改修したカフェです。
ランチや手作り石窯で
焼くピザが好評です。



RaRaLocale

(障害者就労継続支援A型事業所)

パスタとパンのお店です。
レトロな建物なので
ライブなどのイベントも開かれます。
週20時間以上働ける人は
雇用保険など社会保険に加入します。

「ララロカレ」
イタリア語で「地元の」
という意味です。



ワークサポート・いこう (障害者就労継続支援B型事業所)



より広い層の利用者さんに通っていただけるよう
施設等を整備し、平成28年11月に移転しました。
働くことの土台作りを目指すとともに
少しずつ工賃も得ていきます。



田辺市上屋敷2-6-31

営業時間

9:00~14:30 (月曜定休日)

TEL 0739-20-5595

田辺市上屋敷2-6-7

営業時間

主・日・祝 9:00~17:30 (火曜定休日)

平日 10:00~17:30

TEL 0739-34-2146

田辺市上屋敷1-7-28

開所時間

月~金 9:30~16:00

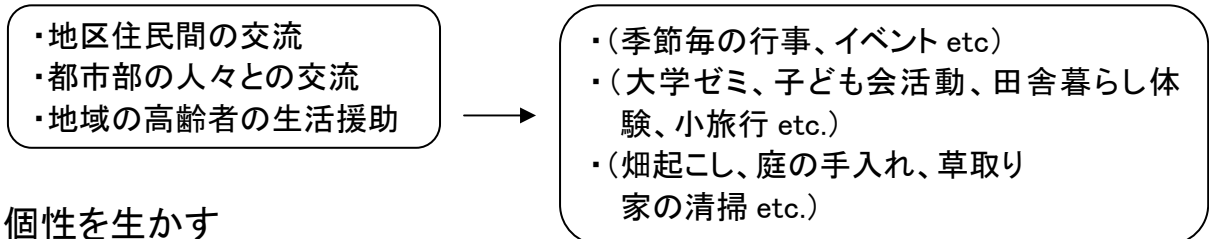
TEL 0739-25-3888

特定非営利法人 共生舎

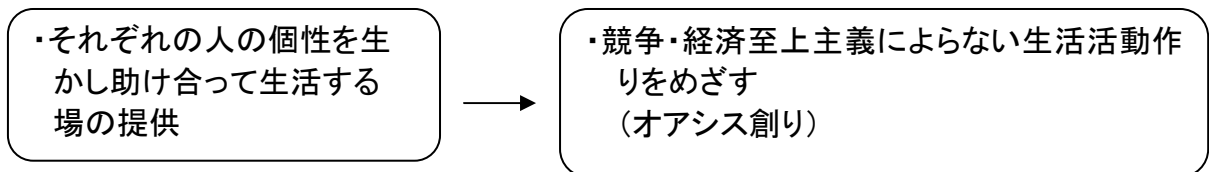
私共 NPO 法人共生舎は社会福祉法の制度に依らずそれぞれの立場の者がその個性を認め生かし、お互いに助け合って生活していくという理念の下に活動しております。

主な活動

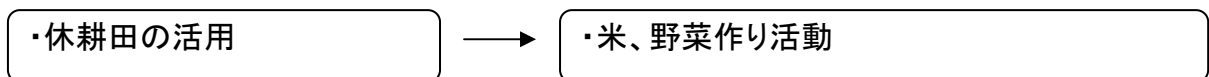
・助け合い



・個性を生かす



・自給自足をめざす



活動の場

・山あい拠点

田辺市(旧大塔村)五味 240-10 共生舎 古民家 定員 10 名

ただいま活動に共鳴していただける方を求めています

1. 正会員になる。(年会費 5,000 円)
2. 共生舎のPRをしていただける方
3. 上記行事などへのボランティアに参加していただける方
4. 財政的援助をしてくださる方(金額は問わず)

連絡先 NPO 法人共生舎 田辺市五味 240-10
(Tel) 0739-62-0400

田辺市「ひきこもり」検討委員会設置要綱

(設置)

第1条 思春期・青年期にある者(以下「青少年」という。)にみられる「ひきこもり」の問題について、関係機関が相互に連携して一体となって取り組むことを目的として、田辺市「ひきこもり」検討委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(検討事項)

第2条 委員会は、前条に規定する目的を達成するため、次に掲げる事項について検討等を行う。

- (1) 「ひきこもり」の状態にある青少年についての支援活動に関すること。
- (2) 前号に規定する青少年に関する問題点等について検討すること。
- (3) 「ひきこもり」の予防活動に関すること。
- (4) 「ひきこもり」に関する研修や研究会に関すること。
- (5) 前各号に掲げるもののほか、委員会の目的達成のために必要な事項に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、委員42名以内で組織する。

- 2 委員は、学識経験者、民間支援団体、医療・保健・福祉・教育関係機関、市職員等のうちから、市長が委嘱し、又は任命する。
- 3 委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の在任期間とする

(委員会)

第4条 委員会に委員長及び副委員長2名を置き、委員の互選によりこれを定める。

- 2 委員長は、会務を総理する。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第5条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

- 2 委員会は、委員会の委員の代表による小委員会を設置し、定期的に会議を開き、その結果は委員会へ報告する。
- 3 委員会は、必要があると認めるときは、委員以外の者の意見又は説明を聴くため、その者に委員会への出席又は文書の提出を求めることができる。

(事務局)

第6条 委員会の事務局は、保健福祉部健康増進課に置く。

(その他)

第7条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成17年5月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成18年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成 25 年4月1日から施行する。

Ⅲ－５． 田辺市ひきこもり検討委員会 設置要綱

		選 出 区 分	備 考 (選 出 団 体 ・ 役 職 名)
委 員 長	1	福祉関係団体・機関	社会福祉法人やおき福祉会
副 委 員 長	2	民間支援団体	認定NPO法人ハートツリー 若者サポートステーション With You南紀
副 委 員 長	3	医療関係者・団体・機関	紀南こころの医療センター(臨床心理士／公認心理師)
小 委 員	4	学識経験者	
小 委 員	5	民間支援団体	認定NPO法人ハートツリー ひなたの森
小 委 員	6	福祉関係団体・機関	社会福祉法人ふたば福祉会
小 委 員	7	福祉関係団体・機関	田辺市社会福祉協議会
小 委 員	8	保健機関	田辺保健所(精神保健福祉相談員)
小 委 員	9	田辺市役所	教育委員会学校教育課
小 委 員	10	田辺市役所	教育委員会生涯学習課
小 委 員	11	田辺市役所	やすらぎ対策課(障害福祉室)
小 委 員	12	田辺市役所	健康増進課
	13	民間支援団体	共生舎
	14	青年会議所	白浜・田辺青年会議所
	15	民間支援団体	NPO法人 かたつむりの会
	16	福祉関係団体・機関	紀南児童相談所
	17	医療関係者・団体・機関	精神科医師
	18	医療関係者・団体・機関	精神科医師
	19	教育関係機関	田辺市教育研究所
	20	教育関係機関	田辺市養護教諭研究会
	21	教育関係機関	和歌山県教育委員会 児童生徒支援室
	22	教育関係機関	紀南六高校代表
	23	教育関係機関	西牟婁養護教諭研究協議会高校ブロック代表
	24	学識経験者	文京学院大学(准教授/臨床心理学博士/公認心理師)
	25	学識経験者	主任児童委員
	26	学識経験者	龍神地区
	27	学識経験者	大塔地区
	28	学識経験者	中辺路地区
	29	学識経験者	本宮地区
	30	田辺市役所	保健福祉部長
	31	田辺市役所	子育て推進課
	32	田辺市役所	商工振興課